生活の柄～幻想郷放浪記～

モジカキヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生活の柄～幻想郷放浪記～

【Ｎコード】
Ｎ１８５８Ｚ

【作者名】
モジカキヤ

【あらすじ】
■「旅好きが高じて、浮浪者になってしまった」。ふらりと旅に出て、帰って来たら家が無くなっていた主人公。仕方が無いからまた旅に出るも、行きついたのは、現世では忘れられた者たちの集う場所だった。■いわゆる幻想入り作品です。Ａｒｃａｄｉａにも掲載しています。

一・

旅好きが高じて、浮浪者になってしまった。

旅と言っても私の旅は、列車に乗るだの、船に揺られるだのといった高級なものは使わない。まるきり荷物も持たずに、産まれ持った二本の足で何処までも歩いていくだけである。

ある日煙草を買いに出かけた帰り、ふと思い立ったので、旅に出た。

と言っても、見たいものがあるわけでもないし、行きたい所があるわけでもない。私は旅そのものを目的とするから、ただ純粋に歩きまわったばかりである。

人や風景が歩く速度で通り過ぎて行ったので、色んな連中に出会ったり、また分かれたりした。人間にも大分会ったが、人間以外のものにも大分会ったりした。

人間以外のは人間以外であるから、すなわち人間でないということになる。そういう連中は古くからある妖怪であり、話していても面白かった。

そして不思議だったのだが、一年を半分ばかり過ぎたあたりで、何故だか知らないが、さっぱり腹が減らなくなった。長きに渡る断食の効果かは知れないが、ともかくそれきりご飯を食べていない。ところがどっこい生きている。金がまるで要らなくなったので、大変便利であった。ただ、唐突に酒が飲みたくなるのには参った。我慢したが。

それで、歩き疲れては草に埋もれて眠るような生活をしばらくしてから、アパートメントに帰ってみると、更地になっていた。分譲

の旗が立っているから、大家の爺が土地ごと売ったのであろう。無論、私の荷物も一切が無くなっていた。
しかし、不思議と空虚な心持ではなかった。
考えて見れば、元来家にいない性質であるから、元々家など無かったようなものである。元々無かったものが無くなった所で、悔しくも悲しくもない。

そこまで考えて、自分がご飯を食べなくても生きている事実に対し、一つの真理を見出した。
すなわち腹が減るというのは、腹の中にあったものが無くなるから空くのであって、最初から何も入っていなければ、減るものは何も無い。食わなくなってから、辛かったのは最初のうちだけで、後の方は水ばかり飲んで過ごしていたが、身体の具合はすこぶる快調である。このまま行けば水すら必要にはならないかも知れぬ。

ともかく、帰る家が無くなってしまったので、旅を続けることにした。
しかし、今の自分は浮浪者である。自分では浮浪者のつもりはなく、あくまで旅人であると頑なに言い張るつもりであるが、そこに客観的相違を見出す努力をしてくれる人はあまりにも少ない。
浮浪者に対して世間の風当たりは冷たいものであるから、なるべく人のいる所には行きたくない。そう考えて、人里離れた何処かへ行ってみることにした。

街を通り抜ける時は、それなりにみじめな思いがしたが、通り抜けてしまえば何のことはない。おまけに家だの金だの世の中だのに頓着する必要が無くなったから、逆にすがすがしい心持であった。
それで山の方に行こうかと相成ったのだが、ふと恰好を見てみると服がボロである。これでは自殺者が山へ入って行くのと見分けがつかぬ。

別段死にたいわけでもなんでもないから、そのあたりを心配されて引きとめられては面倒である。世の中の大方の人間は親切とお節介の区別がつかないから、無用の心配をさせるとこちらが面倒なことになる。

仕方がないから、ゴミ捨て場から服を拾ってきた。最近はゴミでなんでもあるから、大変便利である。金など最初から必要がない。

とはいえ、シャツにジーンズだけのが山に入って行くと、これもまた頭のおかしな輩に見られる。むしろ、その方が世の中に疲れた自殺者として見られる。それも嫌だから大きなリュックサックを担いで登山者になりすました。重い荷物は嫌だから、リュックサックの中身は空である。それゆえぺしゃんこだが、遠目に見れば分かるまい。

そうして準備が整ったから、山に入ることにした。

どうせ入るならば、他の連中が入っているような登山口からは入りたくない。あちらが勝手に用意したものに誰が入ってやるものかと思う。

そういうわけだから、動物になった気持ちで茂みの中に入り込んだ。葉っぱがちくちくとしたが、対して気にはならぬ。

しかし歩きにくくて仕方がない。道ではない所を歩いているから、当然と言えば当然なのだが、腹が立ってくる。眼前に大木が突っ立っていたりすると、お前は何故こんな所にのうのうと立っているのだ、と文句の一つも言いたくなる。しかし一人で木に話しかけると気狂いと思われるから止めておいた。

大分日が落ちて暗くなり始めた時分に、ようやく開けた所に出たからホッとした。どうやら川辺のようで、清涼な水がさあさあと音を立てて流れていた。

川辺は周囲より低い所になっているらしく、川の両側は山がそび

えたっていて、見上げてみると、暗くなりかけた空が、山に挟まれて窮屈そうであった。

水が冷たくて気持ちが良かったから、顔を洗った。調子に乗って靴を脱いで足を付けたが、季節が春先だったからあっという間に寒くなり、生まれたばかりの小鹿のようにぷるぷる震える羽目になった。旅慣れて、何もかも知っているといった顔をしながら、こういう詰らない間違いをする。

昼間は春の陽光が差して暖かいが、日が落ちればまだまだ寒い。水辺は開けていて良い所であったが、水辺だから寒い。寒いと眠れない。眠ってしまえば良いのだが、震えて眠れないし、ようやく眠れたと思ったらそよ風一つで目が覚めてしまう。

仕方がないから水辺に分かれを告げ、茂みの中に分け入った。こちらの方が幾分か暖かである。

冬に死滅した蚊がまだ復活していないから、茂みで寝るのも不快ではない。

夏場は気候としては寝やすいが、蚊を始めとした虫たちの襲撃が顕著である。痒くて寝るどころの話ではない。

枯葉をかき集めて寝床を作った。吹けば飛ぶような寝床だが、無いよりはマシである。しかし、意外に暖かいものだ。

枯葉の寝床に潜り込み、ぺしゃんこのリュックサックを畳んで枕にして、上を見てみると、まだ葉の茂りきっていない枝の間から、大きな月が見えた。月明かりが妙に明るく、枝の一本一本がはっきりと見て取れるようだった。

しかし、月とはあんなに大きいものだったか知らん、と思った。上ったばかりの月ならば、大きく見えても納得できるが、頂点ま

で上った月があれだけ大きいのは変である。狸か狐かに化かされているのではないかと思うと、怖くなった。そう思ってみると、木の枝葉の形が妖怪の顔に見えたりするから嫌である。
嫌だ嫌だ、と思いながら目を閉じて、さっさと眠ってしまおうと思った。

目を閉じても肌寒いから、睡魔が歩いてくるには時間がかかる。どれくらい経ったかは知れないが、うとうとし始めた時分、ふと、こちらを見ているような視線を感じた。まとわりつくような視線であった。
気のせいだと思いたかったから、無視する如く目を閉じたままにしていたが、段々と視線だけでなく、気配も濃密になって来るらしかった。
そのうち顔の上の方で小さな息遣いが聞こえるまでになった。体にも何かが乗っているような重みが感ぜられる。何者かが私の体に乗っかって、顔を覗き込んでいるらしい。

子熊が出るか、狐が出るか、はたまた妖怪かと意を決して薄目を開くと、そこにいたのは子熊でも狐でも妖怪でもなく、女の子であった。こちらが目を開けたのを見て、面食らったらしく、きょとんとした目でこちらを見据えていた。

「生きてた」

少女は誰にいうでもなく呟いた。
眠気が飛んでしまったから、私は不愉快である。眉を潜めて少女を見据えた。
月明かりが嫌に明るく、少女を見上げる形になっているから、逆光で顔がよく見えない。しかし、何故が紅い瞳だけが爛々と輝いている。

のそのそ起き上がると、少女の容姿が昼間の如くしっかりと見て取れた。
幼い少女であった。日の本の国にありながら、金色の髪の毛をなびかせ、赤いリボンに黒い服を着ている。山の中にいるにしては不自然極まりない。

「何してたのー」少女が言った。
「眠ろうとしていたのだが、起こされてしまった」
「山の中で枯葉に埋もれて？」
「そうだ」
「変なのー。不自然、そんなの」

変ではない。枯葉に埋もれて寝ている人間は不自然ではない。むしろ自然の中にあると言っていい。
どちらかと言えば、夜半遅くに十に満たないような娘が、山の中をほっつき歩いている方が不自然である。大体、周りに人の通る道はおろか、獣道も見受けられぬのである。まったくこんな所に娘を放り出す親の顔が見てみたい。

「娘さん、キミは何故ここにいるのです」
「お腹空いたから」
「そうか」

お腹が空くと夜中の山を歩き回るというのはおかしい。おかしいと思ったが、話をするのが面倒である。黙ってしまった。
女の子は何ともなしにゆらゆらと左右に揺れながらこちらを見ていたが、やにわに口を開いた。

「あなたは食べてもいい人ー？」

よく分からないことを聞く少女だと思った。
昨今は、「食べる」の言葉が持つ意味合いも、含む意味は多岐に渡る。食物を摂取するという本来の使われ方はもちろん、詩的な用途他性的用途などもあるが、大抵の場合は通常通りの使われ方をするものである。
とすれば、目の前の少女は私を食べ物として見ていることになる。日の本の国に於いて食人の文化は根付いていないから、色々と思う所はあるが、ともかく食われては堪らぬ。
いや、食べてはいかん、と言うと、少女はつまらなそうに口を尖らせた。

「でもお腹空いたー」
「それは僕の知った所ではない。前にご飯を食べたのはいつだ」
「昨日の夜。なんか変な男の人を食べたよ」
「変とはどういう風に変なのだ」
「幻想入りキタコレとか言って喜んでた」
「旨かったか」
「ううん、不味かった」
「そうか」

自分の与り知らぬ所で誰かが食われたようである。そんなことに頓着する自分ではないが、仮にも人間の身として、同じ人間が食われるのは良い心持がするものではない。心の中で名も知らぬ犠牲者に合掌した。

少女が人食いの文化を持つ人種であるのか、はたまた妖怪や狐狸の類であるかはともかくとして、このまま無意味な問答を続けていては、いずれ自分も食われると思った。
太陽が昇れば多少は不安もまぎれるものだが、夜明けまではまだ

時間がありそうだから、それも望めそうもない。しかし人食い少女が目の前にいるから眠るわけにもいかぬ。

「娘さん、名前は」
「わたし？　ルーミア」
「どういう字を書くんだ」
「カタカナだよー」
「では外国の方か。英吉利か、それとも亜米利加か。はたまた独逸か」
「よく分かんない」
「そうか」
「あんたは何ていうの」
「僕は何樫（なにがし）という」
「ふーん。ねえ、勘違いしてるみたいだけど、わたし人間じゃないよ」
「そうか」

なんとなく考えていた嫌な予感が当たったようである。
前にも書いたが、旅の最中何度か妖怪の類に遭遇したことがある。大抵はあまり力のある連中ではなく、人の目を逃れてひっそりと暮らしているのが殆どであった。
印象に残ったのは、旅ガラスを自称する怪しげな男であった。
今思えば天狗だったのであろう。妙に意気投合し、天狗の術をいくつか授けてもらった覚えがある。
目の前の少女がそれらと同類だとしても、私が今まで出会った連中とは少しばかり雰囲気が違うように感ぜられた。
今まで出会った妖怪どもは一癖も二癖もあるような連中だったのは確かだが、人食いをするような雰囲気は持っていなかったのである。
やはり、人里離れた山奥では、妖怪の質も変わって来るのだろう

と思った。

ともあれ、やはり食われては困る。家も金も持たないこの上、命まで放ってしまっては流石に人としていただけない。冥途旅行はまだ先延ばしで構わない。どの道いずれはお邪魔することになるのだから、行くのは遅ければ遅いほど良い。

「ルーミア君」
「何」
「ひとまず重みが体にくる。どいてはもらえまいか」
「うん、分かったー」

そう言うとルーミアはふわりと宙に浮かび上がった。
成る程、確かに妖怪であるらしい。初めて妖怪と会った時は肝が冷えたものだが、そういうものがあるということを知っている今となっては平気である。

「ねえ、やっぱりお腹が空いたから、あんたを食べようと思うんだけど」
「それは困る。僕だって食われるのは嫌だ」
「でも」
「でももだってもあるものか」
「じゃあどうしたらいいの」
「そもそも、腹が減るというのが馬鹿げた話ではないか」
「何で」
「昨晩食べたものが腹から無くなったから、空虚な気分になっているのだろう。しかしそれはあったものが無くなったから故であって、最初から何もいれておかなければそもそも腹が減るということはないだろう」
「……あー、そっかー。あんた、頭いいね」

「つまり食わなければ腹も空かんというわけだ」
「そーなのかー」
「それに僕は痩せていて旨くはないだろう。不味いものを一々食う必要はない」
「それもそうだ」

ルーミアは納得したようであった。
とにかくそういうわけで、食われることは避けることが出来た。そもそも妖怪は元より栄養素の摂取によって存在を保っているわけではないだろうから、食わなくても大した問題にはならない、だろうと思う。

食われることは避けたが、ルーミアは退屈しているらしく、話に付き合う羽目になった。どうにも話がかみ合わない部分があるので、妙な違和感を覚えた。しかし話を進めて行くうちに違和感は氷解した。

ルーミア曰く、ここは幻想郷なる外界から隔絶された空間であるらしい。
そこには外――便宜的にこう呼ぶ――では存在しにくくなった妖怪や異形が寄り集まって暮らしていて、時たま、外の世界から私のような人間だけでなく、外界で忘れ去られた物品などが流れ着くのだそうだ。

それにしても、妖怪の楽園であるような具合であったが、なにやら人間もいるようである。
話を聞くに、人間の文明のレベルは大変昔のまま止まっているらしい。人間は妖怪を恐れ、妖怪は人間を襲う。そういう関係性があって、外ではいないとされる者たちも存在を保っているのだという。
ただ、その形も大分形骸化しているらしい。細かいことはルーミ

アも良く分かっていないようであった。私も興味が無かったから、聞くのは止めた。

「だから人間を食べるの」
「そうか」
「でも里の人間は食べちゃ駄目だから、あんたみたいに外から来た人間を食べるんだけど、あんまし美味しくないんだよ」
「そうか」
「一番美味しいのはナカミなんだけどねー。最近の人間は食べ物の質が悪いみたいで、なんだか妙な臭みがあったりして嫌なんだ」
「そうか」
「あんたもあんまし美味しくなさそう」
「そうか」
「あ。あんたはそもそも何も食べないんだっけー？」
「そうだ」
「道理で痩せてるわけだなー。やっぱり美味しくなさそう」
「そうか」
「そう考えると、なんでわたし人を食べてたのか分かんないなー」
「妖怪が妖怪である為だろう」
「あー、そっか。じゃあやっぱり人間を食べなきゃ駄目なのかなあ」
「人を食う以外でも妖怪としていられるだろう」
「どうやって」
「驚かせばいいではないか」
「なーるほどー」

そんな事を話しているうちに空が白んできた。あちこちで早起きの鳥どもが鳴き始めたらしい。はばたきの音と木がざわめく音とが聞こえて来る。

周りが目を覚まし出した気配がするから、自分も目が覚めたような心持だが、実際のところは殆ど一睡もしていないので、身体は寝

たがっているらしい。しかしそんなことは知ったことではない。体か私かで言えば、支配権は私にある。

ともかく、せっかく幻想郷なる分けの分からん所に来たわけだから、歩きまわらねば勿体ないと思った。折角知り合いになったから、ルーミアに案内を頼んだら快く承諾してくれた。人を食うことを除けば悪い子ではない。

とりあえず人里に案内してもらうことにした。大分昔と言ってもどれくらい昔か分からないから、興味がある。着物を着て刀を振るうというから、大変楽しみである。

私が歩く横をルーミアがふよふよ浮いていた。浮くのは楽そうだな、と言うと頷いた。私も天狗に教わった術で多少なりとも空を飛べる。しかしへたくそで、歩くより余程疲れるから飛ばないことにしている。

ルーミアは妙に話好きだったから、道中話をしながら歩いた。そうしたらあっという間に人里の近くまで来たらしい。まだ朝の時分ということもあって、里からは煮炊きのものであろう煙が立ち上っていた。

見た具合からして、江戸時代かと思ったが、木製の電信柱が立っているようだから、明治の終わりか大正の初めごろであるだろうと見当をつけた。しかし、山村にまで電気が普及しているとなると、昭和の時代やも知れぬとも思った。

さて、里に入ろうかというところでルーミアがもじもじしだした。

「そんな所で立ち止ってどうしたの」

「わたしはここでいい」

「何で」

「わたし人間を食べてたから、里に入ると怒られるから怖い」

なるほど、確かに人食いの妖怪は人間の里で歓迎されるものではないだろう。しかし、昨晩ルーミアは私と話して人食いをしないと言った。人を食わないのに入ってはいけないという道理はない、僕が取り持ってあげるから行こうではないかと言うと、ルーミアは嬉しそうに頷いて付いてきた。里に入ったことがないらしい。

里の入り口に行くと、見張りらしい人が居た。近づいてくるこちらを見とめ、目を細めたようだが、ルーミアの姿を見ると仰天して声を上げた。すると里の中から武器を持った連中がわらわら出て来た。

殺気立たれては困ると思ったので、両手を上げて敵意が無いことを示した。それでも向こうは警戒を緩めぬようである。

お前は何だ、何をしに来たと尋ねられたから、自分は何樫という人間で、外の世界からやってきた。敵意は無く里を見物に来たのだ、と言った。向こうは容易に信じぬ様子だったが、そのうち口髭を蓄えた貫録のある人物が出て来て、では何故妖怪を連れているのだと言った。この人物が里の有力人物であるらしい。

それで、これは自分の友人で、昨晩話して人食いを止めさせた。もう人に悪いことはしないから、里に入れてやって欲しいと言ったら、向こうは仰天した。

「妖怪を諭して人食いを止めさせるとは、あなたは外の世界の仙人か」

「いえ、ただの人間ですが」

「にわかには信じられん」

「しかし事実ですから」

「妖怪と結託する人間も居ないことは無いのだ」

「自分は違います」

「証拠があるか」
「ありませんが、確かに話したのです。ねえ、ルーミア君」
「うん、もう人間は食べない」
「ぐむむ」

黙ってしまった。
里の人々は皆困惑したようにひそひそ話している。こちらとしても、向こうの承諾を得ずに里に入るのは本意でないから、立ちつくしてしまった。

しばらくすると、向こうが少しざわついて、モーゼの海割りの如く人が左右に分かれた。何事かと目を細めると、向こうから女性が一人出て来た。薄く青みがかった白い長髪をなびかせ、妙ちくりんな帽子を頭に乗せている。あれでは落ちるのではないか知らと心配になったが、女性が動いても、帽子が動かない以上、心配は無いのだろうと思った。

女性は迷いのない足取りでこちらにつかつかと近づいてきて、我々二人をまじまじと見た。怖いのか知らないが、ルーミアは私の後ろにそそくさと隠れてしまった。その様子を見たからか、女性はフッと表情を崩した。

それから、どうやら彼女が里の人たちに取り計らってくれたらしく、私とルーミアは里に入ることが出来た。曰く、危険ではないだろうけれども、一応の保険の為自分が預かるとのことであった。

女性は上白沢慧音（かみしらさわ けいね）と名乗った。私とルーミアは慧音さんに連れられて里の中を歩いた。
道中話して分かった事だが、彼女は半妖でありながら人里の守護者で、里で最も有力な人物であるらしい。若いながら大したものだ

と思いかけたが、ふと妖怪の年齢は外見に依らぬということを思い出し、彼女は自分より余程年上であるような気がしてきた。分けの分からん人間と妖怪の二人組の身柄を易々と受け入れるのだから、相応の自信とそれに見合った実力とを備えているのであろう。
ルーミアは始めて見る人里の中に興味津々で、きょろきょろと余所見をしては度々私の背中にぶつかるから辟易した。

慧音さんは、普段は里の寺子屋で教師をしているらしい。その寺子屋に隣接する形で長屋があって、そこに慧音さんの一室があるらしく、案内されて、さあどうぞということになった。
とはいえ、私は元が浮浪者のようなものであるから、屋根や壁があるとなんとなく落ち着かない。座布団に腰を降ろしながらもじもじしていると、慧音さんがお茶を淹れてくれた。温かいお茶を飲むのは久方ぶりであったから、大層旨かった。ものを旨いと思うのは幸せである。腹は減らずとも、ご飯を食べる意味はあるのかも知れぬと思ったが、やはり面倒であった。

「聞きたいことは色々あるのだけれど」慧音さんが言った。「とりあえず何樫さん、キミは外来人、それで間違いないね」
「僕のようなのをそう呼ぶなら、そうです」
「で、そこの宵闇の妖怪」
「ルーミアだよー」ルーミアが横やりを入れた。
「……ルーミアと会ったのはいつだい」
「昨日の夜です。眠ろうとしていたら起こされてしまった」
「眠ろうと？」
「枯葉に埋まってたから死んでると思ったんだよ」
またルーミアが横やりを入れた。慧音さんは呆れたように腕を組んだ。

「この季節に野宿？　それもテントや寝袋もなしに枯葉に埋まって？」
「そうです」
「……あのね何樫さん、今更言うのもなんだけど、それは止めた方がいいよ」
「大丈夫。僕は旅人ですから、慣れている」
「いや、そういう問題ではないけど」
「ではどういう問題なのです」
「下手をすると死んでしまうよ、特にここでは。妖怪も居るし」
「死にやしませんよ」
「何故そう言える」
「現に生きていますから」
「わたしがしているのは先の話であって、今生きているかどうかは関係無いだろう」
「しかし死にはしないでしょう」
「何でだい」
「死ぬ筈がないのです」

慧音さんは諦めたんだか、呆れたんだか分からないが、考え込むようにして黙ってしまった。
しかし現に死んでいない上、身体の調子は悪くない。まだしばらく死にそうにないのは事実である。そうと言う他形容に困る。

やはり慧音さんは諦めていたようで、私の野宿云々を追求するのを止めて、これからどうするのかという話になった。
聞けば、私が元居た、所謂外の世界へと帰る方法はあるらしい。人里に来ることが出来た以上、明日にでも帰ることが出来るらしいが、一度帰るとまたこちらへ来られるかは分からないらしいから、帰らないことにした。そもそも帰る家が無いのである。帰った所で何をするわけでもない。同じように旅に出るなら、こういう分けの

分からない所を歩き回る方が楽しそうである。

こちらに居ることにしますと言うと、じゃあ住む家をと言う。そこまで厄介になるのは申し訳ないから、いえ、僕は外でいいですと言った。しかし向こうはこちらを気遣っているから容易には譲らない。私も慧音さんも中々折れなかったが、最後は向こうが、見ていて心配になるから、家くらいは持ってくれと頭を下げる羽目になってしまった。

そうまでされて断るのは無粋というものである。あまり家には居ないと思いますが、それならそうさせてもらいますと言うと、向こうはホッとした表情だった。

それにしても、先程からお茶ばかり飲んでいるにも関わらず、眠気が重りになって瞼を押し下げ始めた。昨晩ルーミアとの邂逅があった為、殆ど一睡もしていないのが原因であろう。カフェインも大して役に立たぬ。

慧音さん、すまないけれども、僕は昨晩一睡もしていないから、大変眠いのだ。申し訳ないが、一寸眠らせてもらっても構わないだろうか、と尋ねたら、布団を敷いてくれた。

久方ぶりにまともな寝床に入ることが出来たので、床に就くや、瞬く間に眠ってしまった。

二

目を覚ますと天井があるから吃驚(びっくり)した。しばらく仰向けになっていたが、そういえば、慧音さんの所で眠ったのであったと思いだし納得した。

起き上がってぼんやりした。

堪らなく煙草が吸いたかったが、無いので我慢する。

慧音さんとルーミアが見当たらないから、見まわしてみると卓袱台の上に達筆な字で、ルーミアが里を見物したがったから、連れて行く、ついでに買いものもして来る、留守を宜しく云々という内容の書置きがあった。

留守番程度ならば楽なものである。といっても、やることは何も無い。自分の家ではないから、あまり好き勝手にやるのもよろしくないと思い、座布団を引き出してぼんやりしていた。西向きに開いた庇(ひさし)から、暮れかけた日の光が差し込んで来るようだった。

時計が無いから時間は分からないけれども、日の傾き具合からして大分長いこと眠っていたように思う。

朝に里に辿りついて、今西日が差しているから、おおよそ六、七時間程度眠ったのだろうと見当をつけた。

真昼間から寝てしまったのは少し勿体ないような気もしたが、時間は有り余っているし、何をしなくてはいけないということもない。慧音さんに家を紹介してもらったら、早速旅に出かけようと思った。今からでも心が躍るようであった。

ふと、庇の方を見ると、子どもが三、四人居てこちらを伺ってい

た。
私が見ると、蜘蛛の子を散らすようにパッと居なくなった。それでもしばらくするとまた戻ってきて、何をするでもなく私の様子を眺めていた。外から来た人間が珍しいようである。
しかし、私も見られていては何をするわけにもいかない。動物園の動物とは違うから、向こうの期待に応えるようなことはしない。向こうは黙ってこちらを見ているし、こちらは黙って知らんぷりをしている。
そのうち退屈になったのか、子どもたちは姿を消した。視線が無くなったから、心持が楽になった。

私は子供が苦手である。
正確には、子供の集団が嫌いである。姦しくて鬱陶しくて相手をすると疲れる。
一対一ならばまだいいけれど、子供は群れると厄介である。集団になると、個人では萎縮して出来ないことも平気でやるようになるから、品性が無い。

外界を旅していた時、公園で眠っていたら、「やーい、乞食乞食」と六、七人の子供の集団に、棒っきれで突っつき回されて辟易した。
乞食を悪いものとして教育している大人にも腹が立つが、それを眼前に置いて尚、悪いものとして扱う品格の無さが情けなくなった。
そもそも私は今でこそ浮浪者かもしれないが、自分ではそう思っていないから、甚だ不愉快である。
手近な子供に拳骨を落としたら、ぎゃあぎゃあ泣きながら逃げて行って、あろうことか親が出て来た。
いい年をして子供を殴るとは何事か、とご高説を垂れたが、殴られるような育て方をした親の方が悪いから、まるきり堪えない。
また、いい年をして、仕事もせずにふらふらしているとは何事か、とも言われたが、その頃はすでに食わずとも生きていけるようにな

っていた。働くのは食う為であって、食う必要が無いならば、働く必要は無い。働く為に食うなど本末転倒である。また、働いていれば乞食を馬鹿にしていいという道理は無い。ちっとも良いお説教ではなかったから、話の途中だったが、面倒になって逃げた。

まあそれはともかくとして、慧音さんとルーミアは遅い。里を見て回るにしても少し時間がかかり過ぎではあるまいか。

しかし、考えて見れば自分は寝ていたわけだから、二人がいつ出かけたのかは知らぬ。もしかしたら、自分が起きるほんの少し前に出かけたのかもしれない。それならば、まだ出かけたばかりだから、遅いという話では無いな、等と思っていると、木戸を叩く者が居た。慧音さんを訪ねて来た来客だろうと思った。

自分が出ていいものか迷ったが、留守番を任されたのだから、慧音さんが居ないということを告げておいてやるくらいの仕事はしなくてはなるまい。それに、慧音さん本人である可能性もある。私は腰を上げて木戸に向かった。

「どちらさまでしょう」

と木戸を開けると、女の人が立っていた。

山伏が付けるような飾りを頭に乗せ、背中には黒い翼がある。

成る程、天狗かと思った。作り物としか思えない笑顔を張り付けていたから、どうにも良い印象が無く、私は眉根をひそめた。

「こんにちは。あなたが最近やって来た外来人の何樫さんですか」

と女は言った。

驚いたことに、慧音さんではなく私に用事があるらしい。

胡散臭い女だから、あまり関わりたくはないと思ったが、捕まってしまったからには仕方がない。そうですと言うと、女はニンマリ

と笑った。これは作り物ではなさそうだった。

女は射命丸文（しゃめいまるあや）と名乗った。

思った通りに天狗だそうで、個人で新聞を書いているらしい。それで私のことを取材させてもらおうとやって来たのだそうだ。昨日今日の出来事であるのに、随分耳が早いものだと感心した。

それにしても、私が外界で出会った天狗といい、この射命丸天狗といい、どれも鼻がちっとも高くない。翼がある他は普通の人間と区別がつかぬ。しかも外界の天狗には翼すら無かったから、余計に分からなかった。

しかしそもそも天狗というのは、人間の常識で説明できないことを、超常的存在の仕業として説明する為の方法であった。それゆえ、西洋の人が偶然この国に現れた時、彼らもまた天狗として扱われたのであろう。だから鼻が高いというイメージが流布しているのである。

だが、ここ幻想郷に於いては、目の前の射命丸の如く、種族としての天狗も存在しているようだから、種族としての天狗と、人間のイメージとしての天狗と、どちらが先かは分からない。ただ、超常の力という点に於いては同じである。

話が脇道にそれてしまった。

ともかく、射命丸という天狗の記者がやって来た。

しかし、私は取材など嫌だったから、折角ご足労いただいたけれども、取材など生まれて此の方受けたことが無いし、大して面白いことも言えないから、自分もあなたも恥をかくだけです、だからお断りしたい、と言うと、向こうも折れない。ここのところ、生きて里まで辿りつけるだけの人間は珍しい、おまけにルーミアまで手懐けたというくらいだから、詰らないなどとんでもない、何でもいい

から話して下さい、と言った。
　それでも嫌だったから、何べんも断りを申し入れたが、新聞記者の根性なのか、向こうは一向に折れない。段々面倒になって来たから、じゃあ少しだけ話しますけれど、新聞が詰らなくなっても、自分は一切の責任を負えませんよと言うと、記事を面白くするのは記者の仕事ですから、そこに頓着する必要はありません。と言った。仕方がない。

「ではまず写真を」
「写真は苦手なのですが」
「まあそう言わず」
「仕方ありません」
「もう少しこちらに、そこでは逆光なので。ああ、いいですね」
「ポーズを決めた方がいいだろうか」
「意外にノリが良いですね。では卓袱台の向こうに座ってもらって、はい、いいですね。ああ、こうしてみると中々いい男じゃないですか」
「お世辞はいらんです」
「まあまあ、へそを曲げないで。はい、笑って下さーい」

　そういう具合で何枚か写真を撮られた。フラッシュが焚かれたから、目がちらちらした。
　それから射命丸は卓袱台を挟んで私と向き合い、手帳を広げた。

「ではインタビューに行きましょう。まずお名前を」
「もう知っているではないですか」
「そうですけど、これも形式ですので」
「いや、もう知っていることを一々聞き直すのは阿呆の所業ですから、僕は気に入らない」
「はあ」

「知りたいことを尋ねれば、それで事足りるのではありませんか」
「分かりました。じゃあそうします。幻想郷に来たのはいつですか」
「それが分からないのです。気がついたら居たものですから」
「では、いつまで外の世界に居たと覚えていますか」
「昨日の昼までは居たと思う。山に入ったのですが、そこで野宿をしようと思ったらルーミア君に起こされまして」
「成る程」
「里に着いたのが今朝方です」
「そうですか。それで、幻想郷でこれからどうするのですか」
「どうする、ってどういうこと」
「つまり、これからの計画ですよ」
「計画なんて気の利いたものは持ち合わせていないから、答えられない」
「それでも明日はどうするだとか、そういうことはあるでしょう」
「それは明日になってから考えます」
「幻想郷に来てみて、どう思われましたか」
「そう言われても、まだ来て一日も経っていないし、さっきまで寝ていたからどうも思わない」
「でも何かあるでしょう」
「自分が居た所より、大分古くて趣があるようには思った」
「どのように趣がありましたか」
「どのようにと言っても、そりゃあ僕の居た所より大分古いから、そういう古い趣があるわけで。ねえ射命丸さん、もう止めようじゃないか、下らないから」
「それもそうですね。じゃあルーミアをどうやって手懐けたか教えて下さい」
「別に手懐けたわけではないです」
「それでも普通の人間と妖怪とが一緒に居るのは珍しいですから」
「僕はただ食われまいと頑張っただけです」
「その頑張りを聞かせてもらいたいですね」

「はあ」
「どうやって頑張ったのですか」
「向こうがお腹が空いたと言うから、じゃあ食べなければいいと言ったのです」
「逆ではないですか？　お腹が空くから食べるのでは」
「いえ、そうではなくて、お腹が空くというのは、お腹から物が無くなるから空くのであって、ならば最初から何も入れておかなければ、無くなるものは何も無いではないか、とそういう話をしただけで」
「それは凄い理論ですね」
「しかし現に僕は何も食べずに生きていますから」
「それは凄いですね」
「凄くはないです。減るものが無いから、減らない。そういう道理に乗っ取っているだけですから」
「何故慧音さんの所に？」
「それは話すと長くなるのですが」
「長くてもいいですから、話して下さい」
「それは僕が面倒ですから、嫌です」
「まあそう言わずに、お願いします」
「嫌なものは、嫌です」
「困りましたねえ。ところで、お茶でも飲みませんか」
「いや、ここは慧音さんのお家だから、勝手にお茶を淹れてはいかんです」
「大丈夫です。わたしは慧音さんのお友達ですから」
「僕は家主が居ない時に客人が好き勝手をするべきではないと言っているのであって、あなたが慧音さんと友達であるかどうかは問題ではない」
「はあ」
「だから止めておきましょう」
「じゃあそうします。ではお茶屋にでも行きませんか」

「僕は慧音さんから留守番を頼まれているから、それも駄目です」
「では、わたしが外からお茶を持ってきますから、それでどうです？」
「そんなら、いいです」

私がそう言うと、射命丸は出て行った。
そこまでしてお茶が飲みたいのかと思ったが、ふと自分も大分喉が渇いているのに気がついた。喋り続けていると喉が渇くものなのだなと思った。
日も大分落ちかけていたから、慧音さんとルーミアが何をしているのか妙に心配になった。二人が帰ってくれば、面倒なインタビューも切り上げられそうな気がするのだが。

そんなことを考えていたら、慧音さんたちが帰って来た。何やら大荷物を抱えているようだった。
何を買って来たのです、と尋ねると、ご飯の材料だと言う。そんなに買ってどうするのだろうと思ったが、慧音さんが沢山食べるのかもしれないと思って黙っておいた。

それから直ぐ後に射命丸が戻って来た。「お茶のデリバリーなんてしたのは初めてです」などと言っていた。妙に楽しそうであった。それを見た慧音さんが怪訝な顔をした。射命丸が私のインタビューに来たと知ると、嘆息した。一応知り合いではあるようだが、仲が良いとは言えないらしい。しかし射命丸の方はまるきり気にしていないようである。新聞記者の根性と言うやつだろうか。迷惑なものだ、と思った。

それからよく分からないうちに、インタビューが再開された。
慧音さんたちが帰ってくれば切り上げられると思ったのだが、慧音さんもルーミアも私に関わった人物だから、まとめてインタビュ

ーされた。何と答えたかはよく覚えていない。
一時間ばかりしてからようやく放免となり、射命丸が帰って行った時は、ホッとした。後日、刷った新聞を持ってきますと言っていたが、もう来なくてよろしいと思った。

それから気を取り直して、慧音さんに、随分遅かったですね、と言った。
曰く、昼間は寺子屋で仕事をしていたから、書置きをして行ったのは私が起きる少し前だったらしい。
それより前は、「寺子屋に行きますから、留守番を云々」という書置きを置いて行ったらしいが、帰って来てみれば私はまだ寝たままだったから、書置きを私の見たものに書き直して、ルーミアと出かけたらしい。二度手間をかけさせて申し訳なかったなと思った。

とにかく、そういう心遣いをするのもされるのも嫌だから、さっさと自分の家でも外でもいいから出て行きたいと思った。
慧音さんに、家はどうなっているのです、と尋ねると、まだ見つかっていないから、見つかるまではここに居てくれて構わないと言われた。
しかし、宿ならばともかく、相手の好意だけにすがって居座るのは嫌である。
宿ならばこちらはただのお客だから、なんの遠慮もいらないが、向こうが恩をかけてくれて泊めてくれているのでは、妙に恐縮してしまうし、こちらも気を遣わなくてはいけないから、面倒である。

そういうわけだから、自分はさっさと出て行きたい、家が無いなら無いで、外で眠るから心配は要らない、ここらで御免を被ろうと思うのだが、と言うと、案の定引きとめられた。それでもやはり御免を被りたいと言うと、もしかして、わたしと居るのが嫌なのか、とまで言われてしまった。

そういうわけでは決してないのだけれど、慧音さんは私に嫌われてしまったと思ったのか、両の目に涙を溜めていたから、気の毒になって、じゃあ家が見つかるまでは厄介になります、ということにした。

それから、自分は気を遣ったり、遣われたりするのが嫌なだけで、慧音さんを嫌っているわけでは決して無いということを丁寧に説明しておいた。

納得してくれたようで、それなら別に気を遣ってくれなくてまったく構わない、自分の家のように思ってくれて大丈夫である、と言ってくれたのだが、他人の家で他人に気を遣うのは自分の性根のようなものだから、言われて変えられるものではない。だから、結局気を遣ってしまうから、なるたけ早く家を見つけて下さい、と頼んでおいた。

理由は何であれ、さっさと出て行きたいと言われるのは良い心持がしないようで、慧音さんは眉根をひそめていたが、なんとか了承してくれたようだった。

私などは、家がある時には来客にさっさと帰って欲しかった人間だから、お客が早く出て行きたいと言ったら喜んで、今すぐにでもどうぞ、と言うだろうと思った。だから、慧音さんは大層大人であると感心した。

ともかく、家の一件は後回しにするとして、卓袱台の上に二人が買って来た食材が次々に取り出された。卓袱台の上には納まりきらず、畳の上まで広がった。

こんなに買ってきてどうするのです、と尋ねると、ルーミアに人間以外の味を覚えさせなくてはいけないから、色んな物を食べさせようと思った、とのことであった。流石は寺子屋の先生である、着眼点が優れている。

ルーミアの様子はどうだったか尋ねると、楽なもので、寺子屋でも子供たちと直ぐ仲良くなった、ということだった。
慧音さん曰く、里にも妖怪は居るし、里の中で悪さをしない限りは、里の外で人間を食っていてもいいのだそうである。里の外で食われるのは、人間の自己責任ということになるらしい。成る程、外を歩く時は注意しなくてはなるまいな、と思った。

とにかくそういうわけで、では夕飯を作ろうということになったのだが、実際のところ料理が出来るのは慧音さんだけである。
私はそもそも食べないから料理とは縁が無い。ルーミアは言うまでも無い。
昔、まだ家に住んでいた時も、食べるのが面倒だから朝ご飯は食わず、昼ご飯と晩ご飯とも纏めて、夕方頃になるたけ美味しいものを食べるように努めていた。不味い物を一々食べるのは嫌である。
その晩ご飯だって、晩ご飯と言うより晩酌の肴で、まともにご飯を食べていたようには思えない。だから料理も長いことしていない。忘れてしまった。

しかし、出来ないからといって手伝わないのも悪い。久方ぶりに包丁を握って、葱を刻んでいたら、最後の方で指を怪我した。葱が血まみれになってはいかんと思い、直ぐに逃げ出した。ルーミアが涎を垂らしていたが、慧音さんが「めっ」と額を叩いた。
これでは逆に邪魔なだけだと思い直し、食器その他諸々を準備して、大人しく待っていることにした。ルーミアも危うく鍋をひっくり返しそうになったということで、私の隣に鎮座している。

「良い匂いがする」
「そうだな」
「人間以外を食べるのは初めてだなー」
「そうか」

「あんたも今日は食べる？」
「食べるともさ」

折角作ってもらったのに食べないのでは失礼である。不味ければ食いたくはないが、慧音さんの手際の良さから見るに、決して不味いものは出来ないだろうと思う。

そもそも私が物を食べなかったのは、食べるものが無かったから食べなかったのであって、食べるもの、それも美味しいものがあるならば、食べない努力をする道理は無い。世の中には不味いものが溢れているから、それをわざわざ食べるのは面倒だが、美味しいものならば、食べたい。

料理が出来たそうだから、台所から運ぶのを手伝った。

鶏団子と大根の煮物、卵焼き、小松菜のお浸し、厚揚げの焼いたやつ、独活（うど）のマヨネーズあえ、鱈の西京焼き、貝と海藻の酢の物、それに味噌汁とご飯である。

些かおかずが多すぎるような気もしたが、色んな物をルーミアに食べさせるという狙いがあるから、仕方が無いと思った。

食べるにしても私は食が細いから、ご飯はほんの少しでいいと言った。

おかずを見まわしながら、自分が刻んだ葱が何処に使われているか分からなかったから尋ねてみたら、味噌汁に浮いているのがそうだと言われた。指を切った甲斐があるのか無いのか分からぬ。

各々がご飯をよそい、味噌汁を椀に入れて、さあ食べましょうということになった。

私は久方ぶりの食事だから、どうにも要領が掴めない。

箸を持つ手が何だか不自然で、ものを掴むのに苦労する。ルーミアは生まれて此の方箸など持ったことが無いというので、やはり四苦八苦しているようだった。

「ああ、違う違う、こちらをこうして、こうやって持つんだ」
「こう？」
「そう、それで上の方だけ動かすようにして御覧」
「んー……あ、出来た」

慧音さんが持ち方をルーミアに教えていたので、横目でそれを見習い、どうにか要領が掴めて来た。それでようやくまともにご飯を口に運ぶことが出来た。
久方ぶりのご飯は大層旨かった。しかし、米を食べてはあっという間に腹が膨れてしまう。少なめにと言ったけれど、米は小さじで一杯も食べれば十分である。茶碗半分も盛られていては、困る。
確かに、普通の人からすれば少なめだろうけれども、私にとっては大盛りもいいところであるから、困った。
見れば、ルーミアは既に一杯目の茶碗を空にして、二杯目に取りかかり、「人間より美味しい」と言いながらおかずをあれこれ突っついていた。

「ルーミア君」
「何？」
「まだ食べられるかい」
「うん」
「じゃあ僕のご飯も食べてくれないか」
「もういいの？」
「お腹が一杯だ」

私が言うと、慧音さんが心配そうな顔で、口に合わなかったかと遠慮がちに聞いてきた。
いえ、そうではなく、自分は本当に食べられないのです、しかしおかずはいただきます、と言うと、安心したようだった。

おかずは色んな味があるから、米を食べるより箸は進む。しかし、どうにも酒が飲みたくなってくる。
何となくうずうずしていると、慧音さんが「お酒は飲めるかい」と言った。渡りに船である。もちろん、飲めますと言うと、台所から一升瓶がやって来た。

「ここのところ、晩酌を一緒にする人も居なくてね」
「そうですか」

では一献。
お互いの杯に清酒を注いで、飲み干した。ご飯と同じく、久方ぶりの酒だから実に旨い。

私は、ご飯は食えぬ性質であるが、酒は好きである。その上大分強いように思う。だからついつい沢山飲んでしまう。
昔、旅先で運良くウイスキイが手に入った時、大事に呑み伸ばそうと思ったのだが、その日の晩に空になった。

良い気分で杯を傾けていると、ルーミアが自分も飲みたいと言った。
子供には早いと私が言うと、子供じゃないから頂戴と言う。
困って慧音さんの方を見たら、じゃあ一杯だけ飲んでみたら、と言うから、杯に少しばかり注いでやったら、私の真似をしたのか一息に飲み干して、顔を真っ赤にしてひっくり返ってしまった。
やはり子供ではないかと慧音さんと二人して笑った。

ひっくり返ったルーミアを寝床に放り込んで、酒盛りを続けた。
普段は一人で飲むのかと尋ねると、一人の時はあまり飲まない、お客が来た時に飲むのだ、と言う。

「妹紅（もこう）というのが居てね」
「はあ」
「少し粗野で、言葉使いが乱暴なきらいはあるが、さっぱりしていて気持ちの良い娘なんだ」
「そうですか」
「その妹紅が時たま遊びに来るから、そういう時に飲むね」
「成る程」

話だけではよく分からないが、そういう友達が居るのだろう。私には碌な友達があまり居ないから、いいものだと思った。

酒盛りは続き、酒の肴に早変わりした晩ご飯のおかずが皿から姿を消し、一升瓶が三つも四つも床に転がった。どうにも際限無く飲んでしまうから良くない。
私は軽い酔い心地だが、慧音さんは私に付きあって飲みすぎたらしく、ぐでんぐでんになってしまっていた。

「慧音さん」
「んふふー、なんれすかあー？」
「片づけは僕がやりますから、あなたはもう寝た方がよろしい」
「いやあー、まだのめるよおー？」
「そんな具合で飲む酒が旨いものですか、ちょっと失敬」
「やー、どこさわってるんらー、なにがしさあん」
「腕です。抱えているだけだよ」
「あはははは、すわってるのにうごくぞおー」
「愉快ですか」
「ゆかいだなあー、あはははは」

子供のようになってしまった慧音さんをずるずる引きずり、すで

に寝息を立てているルーミアの横に押し込んだ。布団に入ると、慧音さんも直ぐに眠ってしまった。
眠ったはいいが、何故か私の腕をがっちり掴んで放さない。困ったものである。
仕方が無いから、腕の力が緩むのを待って、緩んだ隙を見てさっと腕を引きぬいた。成功であった。

それから空になった食器を片づけ、酒瓶を片付け、すっかり元の通りに戻してから、慧音さんの様子をもう一度見に行くと、ルーミアががっちりと抱きつかれていた。体の良い抱き枕が手に入ったと見えて、慧音さんの寝顔は良好であるが、抱き枕にされたルーミアは苦しいらしい。目は覚ましていないこそすれ、むにゃむにゃと唸っていた。

昼間寝たから眠気が来ない。
何ともなしに往来に出てみると、昨晩と同じく月が見事に光っていた。
ここで見る月は大層大きい。月明かりだけで道を歩ける位である。
煙草が吸いたくなったが、持っていない。我慢することにする。

少しばかり歩いて行くと、見張り塔があったから、ちょっとお邪魔しますよ、と言ってよじ登った。見晴らしが大変良かった。
春の夜風が自分を吹きつけて、胸の中まで穴を空けるような心持がした。
酔いがいっぺんに醒めた。

月明かりで、向こうの山の影が嫌にくっきりと見えた。
あの向こうから自分はやって来たのか知らと思った。

三

翌朝、目覚めた慧音さんは辛そうであった。所謂二日酔いというやつである。

私は酒を飲み始めてから一度もなったことはないが、大層辛いものであるらしいから、慧音さんに同情した。また、自分に付き合わせたのが悪かったのか知らと思った。

二日酔いには蜆(しじみ)の味噌汁が良いと言うが、生憎と蜆は無い。

仕方が無いから、熱いお茶を淹れてあげた。

お茶を飲んだら慧音さんは幾分か落ち着いたようだった。しかし、立ち上がろうとしても足元がふらつくし、頭は痛いし、ちょっと刺激が来ると吐きたくなるそうで、とても辛いとのことであった。

そうはいっても、私が代わってやるわけにもいかないから、苦しむ慧音さんを茫然と見つめているだけであった。ルーミアはというと、既に元気で、私の背中によじ登ったり降りたりして暇をつぶしているようだった。

ともかく、洋服のままではいかんだろうから、せめて寝巻に着替えるべきであろうと思った。

着替えさせてあげようかと思ったが、女人の服を男が着替えさせるべきではないと思い直した。

そこで、役には立たなさそうだがルーミアに手伝いをさせて、私は部屋の外で慧音さんが着替え終わるのを待った。なんとか着替えられたようだったが、動いた分だけ余計に気持ち悪くなったらしい。

りんごをすってあげたが、一口だけ含んで止めてしまった。

他に何か欲しいものがあるか、と尋ねると、酸っぱいものが欲しいと言うから、梅干しを持って来てやった。

他にはないかと言うと、欲しいものは無いけれど、これでは今日寺子屋に行かれない、プリントは作ってあるから、それを寺子屋に持って行って子供たちにやらせてくれまいか、ということであった。
嫌だったけれども、一宿一飯の恩義もあるから、それならば構わない、お安い御用だ、と言うと、慧音さんは幾分か安心したようだった。

そういうわけで、嫌だけれども寺子屋に行くことにした。
寺子屋は長屋の直ぐ隣にあるから迷わない。
昨日寺子屋に行ったルーミアは楽しかったらしく、妙に愉快な様子で私の後ろをふよふよ浮いていた。

「昨日行ったけど、寺子屋、楽しかったよ」
「そうか」
「今日は何して遊ぼうかな」

寺子屋に入ると、中に居た子供たちが一斉にこちらを向いたから、ひどく居心地が悪かった。前にも書いたように子供の集団は苦手である。
しかし、子供たちはルーミアを見ると、「あ、ルーミアだ」と喜んだ。昨日一日で随分仲良くなったようだから、子供は打ち解けるのが早くてよろしいと思った。
ルーミアが身代わりになったから、私に注目が集まり過ぎなかったのは、よかった。

ともかく、余計な事を喋るのは嫌だったから、プリントを配って、これをやって提出したものから遊びに行ってよろしい、ということにした。そうなると子供は早いもので、次から次へと、終わった終わったとプリントを私に押し付けに来た。

それで遊びに行くかと思えばそうではなく、おっさんは何者だ、ルーミアのお父さんか、と言う。いや違うと言うと、じゃあ慧音先生の恋人かと言うから、それも違うと言うと、じゃあ一体何だということになった。

最近の子供はませていて嫌である。私などに頓着せずにさっさと外に遊びに行けばいいと思うのだが、そうではないらしい。意味のない質問ばかりされて辟易した。

ともかく、プリントはさっさと終わり、子供の質問に答えるのも面倒だったから、逃げるように寺子屋を出た。

追いかけられたが、こちらも大人であるし、旅が長いから子供の足に遅れは取らない。直ぐに逃げ切ることが出来た。

何も考えずに逃げたから、見知らぬ所へ来た。

広場のようになっていて、随分立派な龍の像が立っていた。目が白く光っていた。

通りがかった人に、これは何の像ですかと聞いたら、龍神の像だと分かった。何故目が白いのですと聞いたら、明日は晴れだからだよ、という答えが返って来た。

「何故晴れだと白いのです」

「それは知らないけど、晴れた時は白いんだよ」

「しかし、白色は晴れとは関係無いでしょう」

「白色は関係無いかもしれないけれど、晴れなら白くなるんだよ」

「分からないな」

「河童が作ってくれたんだが、明日の天気が分かるから、便利なものだよ」

「河童が天気で何なのだ。貴君の話はさっぱり分からない」

「うるさいな、とにかく、晴れたら白なんだよ。おれは仕事があるから失礼するよ」

「そうか、では失礼」

それで一応の居住である慧音さんの家に舞い戻った。

部屋の中では慧音さんが布団の中に転がっていて、すうすうと寝息を立てていた。起こしてはいかんと思ったので、抜き足差し足で座敷に上がり、座布団を引っ張り出して腰を降ろした。慧音さんは起きる様子も見せずに眠っていたから、ホッとした。ホッとしたところで、ルーミアを忘れて来たことに気付いたが、面倒だから放っておくことにした。

プリントを卓袱台に広げて、如何なる問題が出されたのかと目を通してみると、簡単な算術と国語、それから少しばかり年齢が上の子供には、歴史の問題が出されていた。

算術と国語は分かったが、歴史は外界のそれではなく、幻想郷のものらしいから、私にはさっぱり分からない。

まるきり思考するわけでもなく、ぼんやりとプリントを睨んでいたら、慧音さんがごそごそと起き出してきた。

半分夢の中に居るような具合だったが、私を見とめると目が覚めたらしい。ハッとしたように佇まいを直して、「どうだった、塩梅は」と言った。

「別にどうということも無いです」

「皆、良い子たちだろう？」

「はあ」

慧音さんは幾分か気分が良くなったらしかった。それでもまだ何処となく安定していない印象がある。

「申し訳ない、今日は家探しには行けなかったね」

「別に、いいです」
「それにしても何樫さんは酒豪だね」
「酒が好きなものですから。しかし、際限無く飲んでしまうのは良くない」
「うん、酒は飲んでも飲まれるものじゃないってことがよく分かったよ」
「大事なことですから、覚えておきましょう」
「っと、そろそろ昼の支度をしないと」

そう言って、慧音さんは立ち上がりかけたが、やはりまだ安定しない、立ったと思ったら、危なげにふらついて倒れそうになったから、咄嗟に支えようと飛び出した。
しかし駄目で、支えるどころか慧音さんを押し倒し、上に覆いかぶさるようになってしまった。
倒れた先が布団だったから、痛かったりすることは無いけれど、傍から見ると誤解を招きそうな光景である。

そういう時に限って来客があったりする。
倒れたとほぼ同時に木戸が開いて、なびく白い長髪にリボンをつけた少女が入って来た。

「おーっす、慧音、遊びに来た……ぞ……？」
「あ、妹紅、いらっしゃい……」

少女が入ってきて直ぐに私と慧音さんは離れたが、少女の目は点になっていた。先の光景を目撃し、お約束のように勘違いしたのであろう。居心地が悪そうに口をもぐもぐさせて、すーっと木戸を閉めかけた。

「……悪い、邪魔した、また来るわ」

「えっ、あっ！　ちょ、ちょっと待て！　誤解だ、誤解！」

慧音さんは先程までの不安定さを微塵も感じさせぬ俊敏さで、外に飛び出し、少女を引っ捕まえて戻って来た。私は特に何もせずにその光景を眺めていた。

白髪の少女が、昨晩も少しばかり話に出た藤原妹紅（ふじわらのもこう）であった。

成る程、確かに粗野な感じはするが、悪い印象では無い。

こちらは悪い印象は受けなかったが、向こうがこちらにどういう印象を持ったかは知らない。事故だから誰も悪くない。しかし誤解は解いておかねば面倒である。

私はそれほど必死ではないが、慧音さんは必死である。彼女が最大限に努力をしているから、自分が出張って話をややこしくするのも良くないと思ったので、黙っていた。

「慧音に男が出来てたなんて知らなかったな、水臭いじゃないか」
「だから違うと言っているだろう、あれは事故であって、何樫さんとわたしはそういう関係じゃない」
「昼間の座敷に布団敷いてか？」
「それは昨日の夜ちょっと飲み過ぎて……」
「成る程、酒の勢いで、か」
「違う！　確かに酔っぱらったけど、何も無かった！」
「へえー」
「くっ、信じてないな」
「信じてないけど」
「何でだよ！　いい加減に――うっ、気持ちわる……」
「つわりか？　もっと前からの関係だったと」
「だから違うってば！」

先のやり取りの間、私はずっと黙っていた。

慧音さんはもはや涙目である。泣きながら吐き気に襲われているのは気の毒極まりないが、吐き気を肩代わりしてやることは出来ないから、妹紅と二人して背中をさすってあげた。

それにしたって、慧音さんは弁解というか説明が下手だと思った。動揺と二日酔いで頭が回っていない可能性もあるが、これ以上話をややこしくされても、困る。事実でないから自分にはちっとも堪えないが、事実でないことで無用の面倒を被るのは嫌である。

慧音さんの背中をさすりながら、妹紅と話をすることにした。

「妹紅君」
「あー、何？」
「僭越ながら僕も弁解をしたいのだけど、いいですか」
「まあ、いいよ」
「ともかく、僕と慧音さんは何でも無いのだけど」
「うん、知ってる」
「そうか」

すると慧音さんが顔を上げた。

「ちょっと、待て、妹紅。お前、知ってるって」
「うん、どう考えても不自然だったから、まあ事故だろうなーって思ってたけど。慧音が面白いから、からかってみた」
「おまっ……」

慧音さんは顔を真っ赤にしてぷるぷる震えていた。妹紅に掴みかかりたいような具合だが、吐き気に阻まれてそれが叶わぬのであろう、悔しそうにした唇を噛みしめている。

ともかく、誤解が解けた、というかそもそも誤解をしていなかったということで、この話は終わりになった。
私と妹紅は何ともないが、慧音さんは不機嫌になって、不貞寝をしてしまった。

慧音さんが寝てしまったから、妹紅ともそもそ話をした。
家主が脇で寝ているから、お茶も淹れた。
話してみると確かにさっぱりしていて気持ちの良い娘である。
見た目の割に妙に大人びているから不思議だったのだが、話しているうちに私より遥かに長く生きているということが分かった。何やら不老不死であるらしい。人は見かけに依らない。

それにしても、妹紅が来たのは良かった。
私は今夜も慧音さんの家に厄介になるのは嫌である。しかし、二日酔いで具合が悪い慧音さんを放って行くのも嫌だったから、妹紅に慧音さんを任せてしまおうと思う。

しかし慧音さんには一宿一飯の恩義どころか、酒盛りまでさせてもらったから、このまま居なくなるのは釈然としない。しかし、家から出たいのに、礼だと言って家に居座って、家事の手伝いをする等ということになっては、まったく本末転倒である。
宿屋のような扱いをするのは気が引けるが、やはり宿賃を置いて行くのがよさそうだと思った。

だが私は浮浪者、もとい旅人だから、お金など持っていない。
何処かで宿賃を調達して来たいが、働くのは嫌である。嫌だけれども金は要る。
しばらく考えていたら妙案が浮かんだので、妹紅に、少し出かけて来るから、慧音さんを頼むね、と言って出かけた。

往来で、里で一番大きな家は何処にあるか尋ねたら、この先の稗田(えだ)さんが一番の大家だと分かった。それで稗(ひ)田さんのうちに出かけて行った。

戸の前で案内を乞うと、どちらさまでしょう、と聞かれたので、自分は昨日里へやって来た外来人の何樫というもので、外界の珍しい品を持参したから、よければ買い取って欲しいと言った。

そうしたら、少しお待ちを、と少しばかり待たされてから、屋敷の中へと通された。

立派なお屋敷で、大分年季が入っているように思われた。

見る部屋見る部屋に書物が沢山あって、それらがみんな整然と置かれているのが、なんとなく荘厳な感じがした。

庭が見える一番奥まった座敷に通されて、しばらくお待ち下さい、とまた待たされることになった。

待つのは嫌ではなから、出されたお茶をすすって、座敷の外に見える庭の木をぼんやり眺めていた。

ぼんやりしていると、時間の経過がどれくらいか分からなくなるが、ともかくしばらくしてからふすまが開いて、十をいくつか過ぎたばかりの少女が入って来た。後ろに使用人が控えていることから、この家のお嬢さんか何かだろうと思った。肩の上で切り揃えた髪に、花の髪飾りがよく似合っていた。

少女は稗田阿求(ひえだあきゅう)といった。

お嬢さんどころか、稗田家の当主であるらしい。驚いた。よもやまたも妖怪だろうかと思ったが、そうではなく、見た目相応の年齢であることは確かだそうだ。

とはいえ、やはり普通の人間とは違うらしいが、普通だろうと何だろうと、今の用事は物が売れるか否かであるから、余計なことは

考えないでおく。

お目通りの為の軽い世間話の後、では、どんなものを売っていただけるのでしょう、という話になった。

私は山に入る前にゴミ捨て場で拾ったリュックサックを机の上に置いて、これは、外の世界の荷物入れでして、丈夫ながらも軽く、また沢山物が入れられる、竹かごや、木綿の袋に比べて使い勝手は良い筈ですが、いかがでございましょう、と持ち前の詭弁を振るって売りこんだ。

阿求嬢は、リュックサックを手に取って、しげしげと眺めながら私の話を聞いていた。聞きながら、リュックサックを引っ張ったり、押してみたり、担いでみたりと使い勝手を試すのに余念が無い。仕舞いには使用人を呼んで、リュックサックに入れるものを持って来させる始末であった。気に入ったのかもしれない。

とても良い品です。木綿とも、絹とも違って、丈夫ですし軽い。河童が同じようなものを持っていましたが、それよりも良さそうです、と阿求嬢はお気に入りの様子であった。

それでは買っていただけるので、と尋ねると、それはまだ決めかねているらしい。何故というならば、自分はあまり外に出ない、この鞄を買った所で、あまり役に立つ使い方は出来ないかもしれない、ということであった。

しかし、私も引き下がらない。これが売れなければ慧音さんへの宿賃が手に入らぬ。

いや、必ずしも自分が使う必要は無いのです、使用人の方が買い物に行く時にでも、破ける心配はありませんし、背中に背負えますから、そういう意味合いでも持っていて損は無い筈です、と説得にかかると、しばらく考えた後、それもそうですね、と目出度く買っていただくことになった。

相場は知らないけれど、思った以上に高い値段で売れたらしい。
これならば、宿賃を払った余りで旅支度まで整えられるであろうとほくそ笑んだ。ゴミ捨て場で拾ったリュックサックがこういう形で役に立つから、世の中は分からない。
もちろん、阿求嬢には、ゴミ捨て場で拾った等という余計なことは言わない。
リュックサック自体は、多少くたびれているが良い品物だし、知らなくていいことまで知る必要は無いのである。

それと、勘違いしないでもらいたいのだが、元々売りに来た目的は慧音さんへの謝礼の宿賃を工面するためであって、自分の旅支度を整える為ではない。それはあくまで副産物である。
多めに工面出来たのならば、その分を全て置いて行けばいいではないか、という声もあるかもしれないが、謝礼は受けた分相応の額を返すべきである。それ以上に差し上げてしまうと、相手に対して貸しを作ることになる。謝礼とは、自分と相手の貸し借りを無くすのが目的だから、謝礼によって相手に貸しを作っては本末転倒である。それは良くない。

ともかく、目的は果たしたから帰ろうと思ったら、引きとめられた。
阿求嬢曰く、聞けば外来人の旅人の方だそうで、よければ外の世界のお話を聞かせて下さい、とのことであった。
本当は嫌だったけれども、せっかく買ってもらったのに、売っただけでさようならというのは素っ気無いと思ったので、それなら少しだけ、と腰を降ろした。

「外の世界では、とても速い乗り物があるとか」
「あります」

「どれほど速いのですか」
「非常に速いです」
「と、言いますと」
「歩いたり、走ったりするよりは遥かに」
「それは分かりますけど」
「僕は専ら歩いて旅をする人間ですから、乗り物に乗らんのです」

阿求嬢は少しがっかりしたようだった。しかし、知らないものを知っているとは言えないから、こればかりは仕方が無い。

「では、外で会った変な連中の話でもしましょうか」
「変な人たちはもう沢山です。周りに溢れていますので」
「まあそう言わずに、お聞きなさい。まず、桃太郎と戦う前に、鬼ヶ島から逃げ出した鬼の話をしましょう」
「何ですか、それ。嘘ではありませんか？」
「信じるか信じないかは貴女次第ですが、僕は二枚舌を好みません」
「はあ」

阿求嬢は、始めこそ疑惑の眼差しを向けていたものの、話が進むに連れ、のめり込んで来たようで、鬼の話が終わった後も、次は次はと話をせがんできた。

私も話し始めると無暗に楽しくなってきて、では、川を流れ過ぎて海にまで行ってしまい、今はマグロ漁船で働いている河童の話を、等と次から次へと色々な話をしてあげる羽目になった。

ちなみに、嘘は何一つ無い。すべて、今までの旅の中で会って来た連中である。

人目につかぬようにひっそり暮らしている者もあれば、人に混じってコンビニエンス・ストアでレジ打ちをしている者も居た。

「はあ……、凄いですね、旅をしているとそんなに色々な出来事が

あるものですか」
「まあ、そうです」
「やはり自分の目で見て、肌で感じたことはリアリティが違いますね」
「あなたはあまり外に出られないと」
「あまり体が強くないものですから」
「成る程」
「幻想郷縁起を起こす者としては、もっとあちこちに出向くべきだと思うのですが」
「何です、幻想郷縁起というのは」

曰く、幻想郷縁起とは、その名が表す如く、幻想郷の歴史及び、諸々の情報を記したものであって、阿求嬢はなんと肉体こそ違うけれど、魂は千年もの時間を超えて転生を繰り返しているらしい。そしてずっとその縁起を記し続けているのだそうだ。気の遠くなるような作業である。やはり私より大分長い時間を知っているらしい。人は見かけに依らない。

「ああ、わたしも旅に出られたらいいのに」
「出たらよろしい。歩ければ旅には出られます」
「お外にはたまに出かけます。しかし、遠出は難しいです」
「誰かと道連れになればよろしいでしょう。一人旅は気楽でいいですが、幾人かで行くのも乙なものかもしれません」
「ではいずれ、何樫さまの旅に連れて行って下さいますか」
「それは、嫌です」

そういう話をして、ではそろそろお暇します、ということにした。
使用人の方に玄関まで案内してもらって、靴を履いて往来に出て歩きかけた所で、年配の使用人がぱたぱたと追いかけて来た。
何事かと思うと、阿求さまが、とても良いお話を聞かせていただ

いたからお礼を、と言って私の手に巾着を握らせた。中にはお金が入っているような気配がした。

いや、自分はそういうつもりで話したのではないから、こういうものは困ります、と言って返そうとすると、いいえ、あれほど楽しそうな阿求さまは久しぶりに見た、ただでお帰しするには到底忍びない、どうか受け取って下さいと言われた。

そこまで言われては、断るのは忍びない、貰います、と言うと、ホッとしたようだった。

何やら思った以上にお金が手に入ってしまったから、憂鬱になった。自分の思った以上のことが起こると、良いことでも憂鬱になる。怖くなる。こういうお金はさっさと手元から何処かへやってしまいたい。

慧音さんへの謝礼を水増しすることにした。

これは、謝礼の額を清算し直した結果である。

考えて見れば、一宿一飯、酒盛りのみならず、家の世話までしてくれるというから、それを勘定に入れないのは、駄目である。

慧音さんの家に戻ると、ルーミアが帰って来ていた。

妹紅もまだいて、二人してあやとりをして遊んでいた。

慧音さんはまだ眠っているらしかった。二日酔いだけでなく、普段の仕事疲れも相まっているのやも知れぬと推測した。

「おー、何樫お帰り」

「うん、変わりは無かったね」

「なーんも無かったぜ。こいつが来たくらいだ」

妹紅はルーミアの頬をぐにぐに引っ張った。

ルーミアは「ひゃみぇりょー」と両手をぱたぱたさせていた。やめろと言いたかったのだろう。
慧音さんが起きていると出て行きにくいから、今のうちに御免を被ろうと思う。遊ぶ二人を尻目に卓袱台に向かい、簡単ながら手紙をしたためた。

「慧音さんの心配と親切には感謝します。しかし、ここらで御免を被ります。お家探しは続けていただけると嬉しい。一月以内には一度戻って来るつもりですから、その時に見つかっていれば、その家に落ち着きたいと思います。重ねて言っておきますけれど、僕は決して慧音さんが嫌いなのではない、ただ、他人の好意にすがりついて、一所に居座り続けるのが気に食わない、それだけです。少ないながら、宿賃とお家探しの手間賃を置いて行きます。お宿扱いするのは気が引けるけれども、他にやりようが無いから勘弁して下さい。ルーミア君も置いて行きますが、適当に世話してやって下さい。何樫」

こういう具合の手紙であった。これで宿賃を包んで卓袱台の上に置き、余った金を稗田の使用人から貰った巾着に突っ込んで立ちあがった。

「妹紅君」
「なにさ」
「僕は出て行くからね」
「はあ、なんだそりゃ？　何処に」
「何処にということは無いけれど、ともかくそういうことだ。卓袱台に慧音さんに書いた手紙を置いておいたから、よろしく言っておいてくれ給え。ルーミア君、良い子でいなくてはいけないよ」

そう言うと、ルーミアは目をぱちくりさせた。

「何樫、何処行くの」
「それは僕も知らない。じゃ、さよなら」

そう言って表に出た。
間もなく夕飯時と言うこともあって、里は活気付き、家々の窓から夕餉の支度の煙が立ち上っている。
赤く染まった町並みのあちこちで提灯の明かりと街燈の明かりとが点き始め、沢山の店が立ち並ぶ大通りは、夕飯の買い物客でごった返していた。

人が多いのは好きではないが、活気付いた人間が多いのは良い。
外界の人ごみは、生きていながら死んだような顔をした人間が通りを埋め尽くすから、嫌いである。

余った金で旅の準備を整えようと思った。といっても、荷物が多いのは嫌だから、なるべく少なく纏めたい。
テントや寝袋などは、荷物になるから要らない。食料品はそもそも食べないから不要である。しかし、酒と肴は持って行きたい。あれば煙草も欲しい。着替えも、着替えるのが面倒だから持って行きたくない。着替えは要らないが、シャツ一枚では寝るのに寒いから、羽織るものが一着、なるたけ軽くて着やすいものがあると、いい。

そういうわけで、ひとまず買いものに出かけた。
買いものは久しぶりである。しかし、あまり好きではないから、とっとと済ませてしまおうと思う。
商品を一々選んで、レジに持って行って、これはいくら、これはいくらというやり取りをして、ようやくお金を払うというのが面倒で仕方がないが、それをしなくては泥棒になってしまうから、止むを得ない。

酒屋に行って、瓢箪入りの酒を一つと、川魚の燻製とを買った。まだ金は余っている。

煙草は煙管(キセル)やパイプしかなくて、シガレットは無いらしいから諦めた。煙草はシガレットに限る。

何処かでシガレットを取り扱っているところは無いか、と尋ねると、里で一番大手の霧雨道具店(きりさめどうぐてん)か、里を出て少し行った香霖堂(こうりんどう)という古道具屋ならば、あるかも知れぬということであった。

里の外まで行くのは面倒だから、霧雨道具店に行ってみることにする。

うろつき回っている間に、日が暮れたらしい。

提灯と街燈の明かりが本格的に里を照らし始めている。

さながら江戸のような町並みに似つかわしくない西洋風のカフェの前を通り過ぎ、呉服屋、八百屋、雑貨屋等が軒を連ねる通りを抜け、少し行った所に霧雨道具店があった。

成る程、大手と言うだけあって店構えも立派である。

人も大勢出入りしているようで、それを見ると入りたくなくなるが、入らなければ仕方が無いので入ることにする。

天井が高いから、広いような印象を受けたが、人間は地べたを這いずり回るものだから、実際は人が多くて辟易する。何やら安売りをしているようだから、人が多いのであろうと思った。

私は安売りは嫌いでる。

品の良いものは高いから良い。高い筈のものが安く売られているのは信用できない。しかし私が頑張った所で、世の中から安売りは無くならないだろうから、それは置いておくことにする。

ともかく、人の間を縫って、店の中を歩き回った。

道具店というから何を売っているのか見当がつかなかったけれども、詰るところは雑貨屋のようである。それも扱う品が幅広い。食料品もあるし、着物もあるし、果ては刀や槍まであったりする。それに混じって古道具なども置かれているから、節操が無い。
ものが多すぎると、目当てのものが容易に見つからない。一度通り抜けてしまった所にシガレットがあって、もう一度回って来た時に気が付いて手に取った。

ついでに羽織るものも買ってしまおうと思う。
よく見てみると、外界の品も大分取り扱っているようであった。リュックサックもあるし、ダッフルコートや登山靴まである。
稗田家ではなく、こちらに売りに来ても良かったかもしれないと思ったが、もう過ぎたことなので置いておく。

物色したは良いが、服の良し悪しが分からないから途方に暮れてしまった。そこで店の人に声をかけて、良い品は無いか尋ねてみた。

「どういう服をお探しで」
「上から羽織るものがいい」
「ではコートか何かですか」
「しかしコートは重いし、無駄にポケットが付いていたりするだろう。軽くて、ポケットが少ないものは無いものか」
「あるにはありますが、軽い分薄くて役に立たんですよ」
「それは、困る。羽織るからには、防寒の役目を果たせなくてはいけない。軽くてポケットが少なくて、温かいものはありませんか」
「はあ。まあ探してみますので、こちらでお待ちを」

そういうわけで会計台の向こう側の座敷に通されて、お茶を出された。
少し高い所になっているから、店内が見回せて、それでいて自分

は窮屈で無いから、愉快であった。

お茶をすっかり飲んでしまった時分に、店主らしき男性がやってきて、お待たせした、こういう着物があるけれど、これならば如何だろうか、と持ってきた着物を広げて私に見せた。

焦げ茶色のくたびれた薄手のコートであった。要望通り、ポケットも腰の前の左右に二つしか無い。

「しかし、これは随分薄いではないか。見たところ温かくはなさそうだが」

「いや、これはただのコートに見えますが、私の娘が作ったものでして」

「店主殿の娘が作ると温かくなるのかい」

「そういうわけではないのですが、これは魔法の品でしてね」

「魔法とは、何だ」

「本来うちではこういうものは扱わないのですが、偶然一着あったものですから」

「そうか」

「ともかく、少し羽織って御覧なさい」

勧められるままにコートを羽織ったら、妙に温かい。それでいて薄手だから大層軽い。布の中に懐炉でも仕込んでいるのではないかと思ったが、そういうわけでもなさそうである。

これが魔法とやらの力ですか、と尋ねると、そうです、温かいでしょう、しかし、温かくしかならないので、夏場に着るのは難しいです、とのことであった。

娘さんは魔法を使うのかと聞いてみると、恥ずかしながら魔法使いなのです、とのことであった。

成る程、大したものだ、自慢の娘さんでしょう、と言うと、店主

ははにかんで、そうですね、と言った。

「しかし、そんな娘さんの作った服を売ってもいいものですか。一着しか無いのでしょう」

「品物は、使われてこそ意味があります、せっかく作ったのですから、使っていただいた方が、あの子の為にもなるというものです」

「成る程」

そういうことなら遠慮はしない。

ともかく良い品ですから、ぜひ買わせていただきたいが、いくらだろうかと尋ねると、安くは無いが、変えない値段では無かったから、買うことにした。

これで目出度く支度は整った。

しかし、巾着にはまだ少しばかりお金が残っている。

お金を手元に置いておくのは嫌だったから、使いきってから旅に出たい。とはいえ、これ以上買いものをして荷物を増やすのは嫌だから、いっそ酒でも飲んでしまおうと思い立った。

往来をうろつき、手近な酒場に入ると賑わっていた。

知り合いの居ない賑わいは好きである。知り合いが居ると、一々お相手をしなくてはいけない。そういう心配が要らないから気が楽であった。気が楽だと、周りの賑わいも、楽しい。

カウンターに腰かけて、店内をよくよく見てみると、人間に混じって妖怪も居るようである。悪さをしなければ、妖怪も人間と杯を交わし合うものらしい。

そういえば、昨晩も慧音さんからそういう風なことを聞いた覚えがある。

しかし、そう考えると、私とルーミアがやって来た時の里の連中の警戒心が妙に矛盾している気がする。
店員に、「ねえ、矢張り外の妖怪と里の妖怪とじゃ、怖さは違うのか知ら」と尋ねると、もちろんそうです、里では悪さは出来ないことは分かっていますけど、外では里の常識が通用するとは限りませんから、始めてやってくる妖怪には、皆警戒します、とのことであった。成る程、道理である。

ともかく、店の中の酒の匂いに当てられて、どうしようもなく飲みたくなってきた。お金を使いきるのが目的でもあるから、店員に巾着を渡し、これで飲めるだけ飲ませておくれと言った。

直ぐにお燗した熱いのが、徳利に入って出て来た。
良い気分で杯を傾けていると、ふわりと良い匂いがして、隣の席に誰か腰かけたような気配があった。
誰かは知らないけれども、自分の頓着することではないから、気にせずに杯を傾けていると、視線を感じた。やはり隣の席からである。
どうにも気になって、酒の味に集中できなくなってきたから、観念して横を向くと、妙な帽子を被った金色の長髪の女性が居た。

私と目が合うと、女性はにっこりと笑った。
親しげな笑みではあるが、何処か胡散臭い。

「少し、お時間よろしいかしら」

女性が言った。

「はあ」

私は答えた。どうにも嫌な予感がして堪らなかった。

四

胡散臭い輩は苦手である。得意な人は居ないと思うけれど、とにかく苦手である。

目の前の女性は大変な美人であったし、笑顔も親しげなものだが、全身より発される雰囲気が胡散臭くて堪らない。もっと言ってしまえば、胡散臭いというより、何処となくもののけじみていて、怖い。

お時間はよろしいか、と尋ねたにもかかわらず、女性はにこにこしたままで口を開かない。こちらの様子を伺っているのかは知れないが、不気味である。

それで、何の用ですと私が尋ねると、ようやく口を開いた。

「成る程、確かに変な人」

開口一番これである。「はあ」と「何の用です」で変な人も無いものだ。

人のことをからかっているような気がしたから、不愉快になって、女性の方を見るのを止めて、カウンターの木目を睨んで杯をあおった。

「あら、ごめんなさい、気を悪くしないでね」

「別に、そういうわけでは無いです」

「一杯頂いてもよろしいかしら」

「はあ、どうぞ」

いつの間にやら女性も杯を持っている。

こんな胡散臭いのと一緒に飲むのは嫌だけれど、断れないから徳

利から注いでやった。

ふと気が付くと、店からは随分人が減っているようだった。

先程までの賑わいは何処へやら、残った連中も何やら縮こまって、こそこそと飲んでいるらしかった。店員も自分たち二人からは離れた所で、時々こちらを横目で伺っている。

どうにも訝しい心持になった。自分もさっさと出て行きたくなったけれど、件の女性が隣に居るから、席を立つにも立ちにくい。

熱燗は冷めてしまうし、そもそも酒の味がしなくなってきて、嫌な感じだった。

「何樫さん」

唐突に女性が私のことを呼んだ。なにゆえ私の名を知っているのかは分からなかったが、呼ばれたから「はい」と返事をした。

「貴方に少し興味があるのだけど」

「何です、それは」

「言葉通りの意味ですわ。あ、わたし八雲紫（やくもゆかり）と申します」

「はあ、これはご丁寧に、どうも」

何故だかお互いに頭を下げた。

向こうは面白がっているとしか思えないが、私は未だ不愉快である。

「それでね、何樫さん」

「何です」

「昨日、あなたが幻想郷に入って来た時から、見ていたのだけど」

「見ていたって、どういうこと」

「そのままの意味ですわ」

「分からないね」
「ともかく見ていたのだけど、貴方が普通の人間でなさそうだから」
「僕は人間ですよ。食べなくても生きているだけで」
「そういうのはもう人間とは言わないわ」
「じゃあ、何なのです」
「それが分からないのよね。だから興味があるの」
「はあ」
「ねえ、貴方は何者なのかしら？　他の有象無象と同じく、直ぐに食べられちゃうかと思って招き入れたのに」
「ちょっと待って下さい、招き入れたとは、何です」
「あら、そのままの意味よ？　わたしが貴方を幻想郷に招待しました」
「僕は了解した覚えはありません」
「まあ、伝えていなかったし」
「何故伝えなかったのです」
「それは時間が無かったから……」
「そういうのは、僕はいけないと思う」
「ごめんなさい」
「まあ、ここは来たことが無いから、楽しみと言えば、楽しみです。だから、それは言わないでおきましょう」
「ふふ、ありがとう。あ、もう一杯頂いてもいいかしら」
「そっちの杯でいいですか」
「どっちだったかしら、分からなくなっちゃったわね。まあどっちでもいいでしょう」
「それは駄目です。僕の飲みさしを飲ませるのは嫌ですし、貴女の飲みさしを飲むのも、嫌だ」
「あら、お固いのね」
「新しいのをもらいましょう、おおい、店員さん、杯を二つおくれ、あともう一本お燗して」
「お燗は二本、ひとつはこっちにね」

店員は妙に怖がった様子で杯と徳利を持って来て、我々に渡すとあっという間に離れて行った。

「では、どうぞ」
「いただきますわ」

そうしてまた二人して杯を傾けた。段々と愉快になって来るような気がした。
話は一向に進まないけれど、酒が入っているせいか大して気にならない。
出会ったばかりは嫌な予感がしていたけれど、今はそういう気では無い。
嫌な予感とは、紫さんの胡散臭い雰囲気を捉えて感ぜられたものであろうと思う。ただ、彼女より感ぜられるもののけじみた気配は、やはり怖い。

どうやってやったかはともかく、私を幻想郷に招き入れたのは紫さんだということも分かった。おまけに私を妖怪の餌にするつもりだったらしい。酷い話もあったものだと思う。
そういう相手の勝手で今、こういう所に自分が居ると思うと立つ腹もあるけれど、来てしまったからには腹を立てるより、なるたけ前向きに考えた方がいいと思った。

しばらく黙って飲んでいたけれど、そのうち「あのね」と紫さんが杯を揺らしながら言った。見てみると、何処となく頬に朱が差しているように思える。
気が付くと、カウンターに空の徳利が沢山転がっている。気付かぬうちに二人で随分飲んでいるらしかった。

「貴方は大部分では人間なのだけど、何処となく妖怪の影がちらついているの。それも、かなり強力な、ね」
「そんなことは知りません」
「ねえ、外の世界で沢山の妖怪たちと会ったと言っていたわよね」
「言いましたけど」
「普通はね、そういうものと、人間は相容れないの。特に外の世界ではね」
「しかし僕は、自分が妖怪である等とは思っちゃいませんよ」
「ええ、そうね。そういう妖怪じみた気配がほんの少し、それこそブランデーに垂らす紅茶くらい少しあるだけで」
「逆でしょう、紅茶にブランデーを垂らすのです」
「そうだったかしら？　でもそれじゃあ酔えないじゃない。まあ、それはいいけれど、とにかくそうなの。ねえ、貴方ペースが速くてよ？　もう少しゆっくり飲んでくれないと、わたし疲れちゃいますわ」
「それは失礼」

どうやら無意識に鯨飲していたようである。やはり際限なく飲んでしまうのが良くない。思い起こせばかなり飲んだ気がする。
紫さんも大分飲んでいるらしいが、まだまだ余裕がありそうで、中々の酒豪であることが分かった。
ともあれ、自分が妖怪じみているというのは、何とも言えない気分がするもので、酒が入っていなければもっと深く考え込んでいた気がする。尤も考えて見た所で、妖怪だろうと人間だろうと、生きる上で困ることは無いし、酒は飲めるし、食べなくても良いわけだから、楽である。
結局、自分の中では、どっちでもいいのだという結論に落ち着いた。

だが、どっちでもいいとはいっても、なにゆえ自分が妖怪じみる

ことになったのかが気になった。
酒が入っていて、頭の回転がゆっくりになっているから、通常よりも長く思考することになったが、思い当る出来事はあった。

「紫さん」
「何かしら」
「妖怪じみるというのは、妖怪の術を教わると、そうなることもあるのかね」
「そうね。妖怪の術は、人ならざる者の力。それを使うとなると、多少は妖怪じみるということもあるかもしれないけれど。貴方、教わったことがあるの？」
「天狗の術を少々嗜んだ」
「天狗ねえ」

紫さんはさして興味も無さそうに杯を傾けていたが、私が「本人は天狗ではなく、旅ガラスを自称していたが」と言うと、驚いたように手を止めた。
どうかしましたか、と尋ねると、いえ、何でもないわ、と言うものの、そう、あいつから教わったの、と何やら呟いていた。良く聞き取れなかったが、興味が無いので放っておいた。

どうやら、先程のやり取りで紫さんは合点が行ったらしく、そういうことなら、納得だわと一人頷いていた。
私には何のことだか分からないけれど、知っていても知らなくても良さそうなことだし、尋ねると話が長くなりそうだから、よす。

「それで、何樫さんはこれからどうするつもりなのかしら」
「どうするということは無い」
「何処に行くとか、誰に会うとかも？」
「用事は何も無いのです」

「では東の方に行って御覧なさい、幻想郷の東の果てには博麗神社と言うのがあって、そこにお目出度い巫女が住んでいるわ」
「別にお目出度い巫女になど、会いたく無いです」
「まあそう言わず。紹介状を書いてあげましょう」

紫さんはそう言うと、何処から取り出したのかは知れないが、さらさらと筆で一筆たしなめて、折りたたんで私に寄越した。別に要らなかったけれど、断るのも骨が折れそうだから、とりあえずもらっておいた。
それで、もう行くことにしようと席を立った。

「では僕は行くことにしよう。さようなら、紫さん」
「あら、もう行っちゃうの？　連れないのね」
「お金が無いものだから」
「そんなの気にしなくていいのに」
「普段は気にしませんが、泥棒は嫌です。面倒だから」
「あら、面倒事は楽しくてよ？」
「僕は、嫌です」

そうして店を出た。程良く火照った頬に、春の夜風が心地良かった。
相変わらず月が大きい。今夜の寝床は何処にしようかと考えながら、里の入り口に向かった。入口といっても、里の中から見れば出口だから、出入り口というのが本当かもしれない。

途中の横丁の前辺りに、黒くて大きな犬が寝そべっていた。近づくと片眼を開けてこちらを伺ったようだが、また直ぐに閉じてしまった。
出入口には夜警の人が二、三人で火を囲んでいた。私が近づくと、親しげに手を上げて挨拶して来たので、私も挨拶した。

こんな夜更けに何処まで行くんだい。何処ということは無いですが、何処かへ行きます。成る程、何処へともなくふらりと行きたくなるってこともあるね。あります。でも、もう夜だから止めておいた方がいいぜ。何故です。何故って、そりゃあ夜に外をうろついていたら、妖怪に食われてお陀仏よ。いいですから、通して下さい。駄目だよ、無責任に通してあんたが食われちゃ、寝覚めが悪いからね。それはあなた方が頓着する問題では無い、ともかく通して下さい。駄目と言ったら駄目だ。

しばらく問答したが、結局、門からは出られなかった。

仕方が無いから、他の所から出ることにした。

里の周囲は妖怪対策の為か壁で仕切られていて、外へ出るのも容易でないらしかった。

当てもなく里の中をふらついてみたが、いくつかある門の他は出入り口が無いようである。これでは門全てから妖怪が攻めてきたら、逃げ場が無いではないか、と思った。

またさっきの横丁に行くと、犬は居なくなっていた。提灯の明かりが消えていて、街燈の明かりだけがしんしんと灯っていた。

空気が胸に染み入るようで、「ほう」と息を吐くと、少し離れた所で白くなった。

そういえば、旅ガラスに術を教授されたのも、こういう月の晩だったように思う。

あの時は外で酒盛りをして、その勢いで、じゃあ術を教えましょうと云うことになった気がする。

その時のことをふと思い出して、入口が無ければ、壁を飛び越えればよろしいと思い立ち、久々に空を飛んでみようということにな

った。
飛ぶのは下手たが、ここ、幻想郷は空気の具合が違うように思うから、外界より上手く飛べるような心持がする。
ここの天狗たちは翼を持つから、それで飛ぶようだが、私が授かった術では翼は必要無い。「雲踏(くもふ)み」という術の名からも分かるように、空気を踏むのである。

とんとんと足踏みをして、深呼吸をし、壁の上の方を見上げて、やっ、と飛び上がった。自分でも驚くほどに高く飛べたから、逆に飛び過ぎて、あさっての方向へ向かいかけた。
足に意識をやると空気の流れが感ぜられるから、それを踏みしめてさらに高く跳ね上がった。
里は既に遥か下へと遠ざかり、街燈と夜更かしの家の明かりが、不思議な模様を作っているらしかった。

やはり空気が違う。外界では雲を踏むのにも一苦労だったが、この空気はこういった術を使うのに向いているらしい。
調子に乗って高く上がりすぎたら、寒くなって来た。
魔法のコートがあるとはいえ、急激に冷えてはやはり、寒い。
思わず両手で体を抱いたら、その拍子に酒の肴で買った燻製が懐から飛び出して、地上へと落ちて行った。
慌てて追いかけようとしたら、酒の入った瓢箪まで落ちた。
どちらを追うべきか半秒迷い、瓢箪へ向かった。すると煙草の入ったケースも落ちた。
二兎どころか三兎が逃げ、一兎も得られないのは嫌だったから、煙草を追った。酒はさっきしこたま飲んだが、煙草はしばらく吸っていない、現物を見るとやはり煙草が惜しい。
燻製と瓢箪と煙草と私とが、もつれ合って地上へ落ちて行った。
風があるから、途中で品物がばらばらの方向へ飛び去って行く。

燻製と瓢箪に別れを惜しみつつ、煙草を追うが、夜風に乗って逃げて行くから、中々捕まらない。一度手に納まったかと思ったら、するりと抜け出て逃げる。地上は近くなる一方である。焦ると碌なことが無い。

殆ど地上すれすれで煙草を捕まえた。

危うく地面に激突しそうだったけれども、しなかったからいいことにする。

地上まで降りてしまうと、もう瓢箪と燻製の行方が分からない。あっちだのこっちだのと落ちた方向の検討はつくけれど、風が強かったから、実際に落ちた所はまた違う所になっているだろうと思った。そうなると探すのが面倒である。残念と言えば残念だったけれど、特別未練もないから、さっぱり諦めることにした。

ともかく、煙草は無事だった。

これだけの冒険をして手元に残ったのだから、祝杯というか、祝吸というか、ともかく一服やってやろうと、一本口にくわえた。

そこで、火を点けるものが何も無いことに気が付いた。

火の付いていない煙草をくわえているのは間抜けだから、止めた。そして、マッチやライターを買い忘れたことに気が付いて、嫌になった。

買い忘れたけれども、また里に戻って、買い忘れたからマッチをくれというのも、体裁が悪いからやりたくない。

買いに行くにしたって、元々自分は持っていたけれども、使い切ってしまったから、新しいのを買いに来たのだという風な振りをしないと、どうにも心持がすっきりしない。それ以前にお金が無い。

ともかく祝吸を諦め、どうにもすっきりしない心持でシガレット・ケースに煙草を戻した。そうして辺りを見回すと、知らない所であ

った。
里の上に飛び上がったわけだから、落ちれば里に戻るのが道理だが、風に流される煙草を追いかけたから、違うところまで来たのだろうと思った。

それにしたって、今までは少しでも空を飛ぶと、恐ろしいほどの倦怠感に見舞われたものだが、それが無い。
外界では、雲を踏みしめる一歩を踏み出すごとに、鉛の赤ん坊が足や背中に抱きつくような感じがするものだったが、それも無い。
自分が余程妖怪じみて来たのか、幻想郷という所が術を行使するに丁度いい所なのか、それは定かではないが、空を飛ぶのは楽過ぎるから、止めることにした。歩く速さでないと風景も人物も楽しめない。疲れずに雲を踏むのは確かに愉快だけれども、速すぎる。

ともかく旅を続けようと思う。
今いる所がどの辺りだかは見当がつかないけれども、日が昇れば方角が分かるから、気にしないことにする。
世の中には星や月で方角ばかりか時間まで分かる人が居るけれども、私は星にも月にも造詣は深くないから、見たところで、綺麗だなあとは思うけれども、それを有効的に使用することは出来ない。

外界と違って、里の外に出れば街燈は無い。
月がかなり明るいから、もちろん周りは見えるのだが、木が沢山生えていて、所々に光が届かない闇溜りがある。その中に、何か得体の知れないものが居るような気がして、怖い。怖いから早く開けた所へ行きたい。

がむしゃらに歩いていると、林の外れに出たようだった。
林の外まで歩を進めると、ぼんやりとした霧のようなものが漂っていて、その中に月の光が棒のように幾つも立っていた。

幻想的な風景に思わず見とれていると、何処からか笑い声が聞こえるような気がした。小さな女の子の笑い声だった。
また、ルーミアのような妖怪か何かかと思ったけれども、姿が見えないから怖い。妖怪そのものに対しては、さほど怖さを感じたりはしなけれど、得体の知れないものは怖い。何故と言うならば、自分の想像の範疇に納まりきらないからである。

身震いしながら、しかしどうすることも出来ないから、そのまま突っ立っていると、時折、月の光の柱の中を、小さな影が行ったり来たりしていることに気付いた。子供くらいの大きさであるように見える。
目を凝らしてよくよく見てみると、やはり人の形をしていた。まだ十にも満たぬ位のちいさな女の子のようである。しかし、子供が飛ぶ筈は無いから、やはり妖怪の類か何かであろうと思った。何やら羽のようなものがあることからも、それが伺える。笑い声もあちらから聞こえてくる。あの飛びまわっている女の子たちが笑っているのだろう。

正体が分かったからホッとした。
姿の見えないものの笑い声よりは、飛びまわる少女の笑い声だと分かった方が幾分か安心できる。
怖い妖怪だったらば嫌だけれど、他に仕方が無いから彼女たちに道を尋ねてみようと思った。何せ、開けているような気はするけれど、周囲が霧で囲まれているから、開けているような心持がしない。

おーい、皆さん、ちょっとよろしいですか、と右手を上げて歩き出したが、突然水に落ちた。
霧のせいで分からなかったが、私の前は一歩踏み出すと直ぐに水の溜まりがあったらしい。
随分深い水だけれど、流れのようなものは感じられないから、湖

か何かだろうと見当を付けた。しかし、春先の水だから冷たくて仕方が無い。大慌てで元の陸地に這い上がった。

コートを脱いで水を絞り、煙草が全部濡れたことに気づいて憂鬱になった。

結局これで酒も肴も煙草も全部駄目になったことになる。しかしながら、紫さんに貰った紹介状は無事であった。紙だから水には弱いと思っていたのだが、まるきり堪えた様子も無い。紫さんの術か何かが、紙か文字かに込められているのやも知れぬと思った。

ともかく濡れ鼠になってしまって、全く嫌な気分で腕組みをしていると、向こうを飛んでいた少女たちが、いつの間にやら私の周りを飛び回っていた。

「落ちた」
「落ちた、落ちた」
「濡れたねー」
「寒いでしょ？」
「もういっそ泳いじゃえば？」
「あははは、まぬけー」

口々に勝手なことを言うものだから、腹が立ったけれど、こんな年端も行かぬ子供のような連中に怒鳴りつけると、怒鳴った後に嫌な気持ちになるから、止めておくことにした。やはり子供の集団は苦手である。

何か言うのも嫌だったから、ムスッとしたまま座り込んでいると、少女たちは私の髪の毛を引っ張ったり、頬を突っついたり、膝に乗っかったりと遊び始めた。反応しないこちらを反応させようと意地になっているのかもしれぬ。

「怒った？」

「怒った顔してるね」
「もっと怒るかな」
「全然怒らないよ」
「ねー、何か言ってよー」
「無視すんな、ばかー」

向こうが反応させようとするならば、こちらは意地でも反応したくない。
髪の毛を引っ張られて、二、三本抜けたような気配がした。
膝に座った子がぽすぽすと腹にパンチをした。
頬を突っついていた子は、頬をつねり始めた。
それでも私は我慢した。褒めてくれる者も、共に歩む者も居ない孤独な闘いであった。

しばらくの無言の行の末、少女たちは攻撃を止めた。私は勝利したらしい。
しかし、彼女たちは別の手段で攻撃に出た。

「それーっ、これでどうだー」

幾つもの小さな手が、私をくすぐり始めた。これにはさすがに我慢できない。うひょおっと妙な声を上げて私は跳ね上がった。
それでも攻撃の手は私を追撃する。
相手は小柄な少女だから、力では勝てるけれども、小回りが利く上に数が多い。笑い転げる私を、少女たちはこれまた愉快そうに笑いながらくすぐり続けた。笑い過ぎて苦しくなった。腹筋が割れるのではないかと思った。

ようやく解放されて、仰向けで転がって荒く息をした。
霧にぼやけた月の周りに、光の輪が出来ていて綺麗だった。

少女たちはきゃあきゃあとはしゃぎながら、再び湖の上にまで飛んで行ってしまった。
結局聞きたいことも聞けず、くすぐられるわ、煙草は駄目になるわで散々な目に会った。おまけに昨晩ご飯を食べてしまったから、お腹が空いて堪らない。しかし我慢しなくてはいけないから、我慢することにした。
太陽が出ていないし、火も焚いていないから服は一向に乾かないけれど、魔法のコートのおかげで寒い感じはしない。
しかし、濡れているのに温かいというのは気持ちが悪い。気持ちが悪いけれども、服を脱いだら寒くなるからそれも困る。
気持ち悪さと寒さを天秤に掛けたら釣り合ってしまったので、結局どちらにも踏み切れずにいる。
もやもやしたまま時間だけが過ぎて行く。
頭上の月が少しずつ動いているのが分かる。
月が動いているのか、この星が回転しているのか、それはどちらでも構わないけれど、とにかく動いているということは時間も過ぎているということである。

急ぐことや焦ることは何一つ無いから、時間を気にする必要は無いのだけど、決めるべきことを決められずにいるのは、いらいらする。
こうなっては無理やり決めてしまおうと思い、立ち上がった。寒い方を選んだのだ。
コートを脱いだ。脱いだら寒くなった。
寒いけれども、シャツも脱いで水を絞り、ジーンズも脱ぎにくいけれど脱いで、水を絞った。風がぴゅうぴゅう吹き抜けて、濡れた体に冷たく刺さる。霧という水分があるだけ、ぴりぴりした寒さは無いけれど、寒いものは寒い。

震えながらも、絞ったシャツとジーンズをばたばた振って、乾くのを手伝っていやっていたら、湖からまた何かが飛んで来た。見てみると、先程の少女たちとはまた違った女の子だった。水色の髪の毛に青色のリボンをしていて、さっきの子たちより一つか二つばかり年上に見える。

「こらーっ、人間が何の用だ！」

少女は驚くほどの速さで私の前に到達し、右手を突き出してビシッと私を指差した。人を指差してはいけないから、私は顔をしかめた。それに何の用だと言われても、何の用事も無いから答えようがない。

ほぼ全裸の男と、年端も行かぬ少女とが、霧の立ち込める夜に向かい合って睨みあっている。心理学のテストにでも出てきそうな構図であるが、想像すると嫌になった。

さっきよりは乾いてマシになっただろうから、とりあえず半乾きの服を着ることにした。

私が答えなかったから、女の子の方が痺れを切らして声を上げた。

「ちょっと、あたいを無視するなんてどういうつもり！」

「別に無視したわけではない」

「何の用だって聞いたけど、答えなかったじゃない！」

「用事は何も無いから、答えようが無かっただけだ」

「え、そう。用事、無いの」

「無い」

私が言うと、少女は詰らなさそうに口を尖らせた。何を期待していたのかは知らないけれど、勝手に期待して勝手に失望されても、困る。

シャツもジーンズもまだ湿っているけれど、先程の濡れ鼠よりは

大分マシになった。魔法のコートを羽織れば、ほこほこ温まって来る。酒も肴も煙草も軒並み駄目になったが、このコートだけは無事である。良い買い物をしたと改めて思った。

それにしたって、あたりはまだ霧が立ち込めていて視界が悪い。月明かりはあるけれど、霧の中を歩くにしては心許無い。夜露でぐっしょりになるだろうけど、他に仕方が無いから、ここで朝を待つことにしようと思う。

再び腰を降ろす。ふと視線をやると、さっきの水色少女がまだ居た。退屈なのだろうかは知らないけれど、こちらを伺うようにじろじろ見てくるものだから、なんとなく居心地が悪い。

もう寝てしまいたいと思ったのだが、下手に眠ると先程の悪戯少女どもが舞い戻って来るとも考えられる。文字通り、寝耳に水を入れられては堪らない。眠っているのを起こされるくらいなら、最初から眠らない方が幾分かマシである。

そういうわけだから、特に意味も無く私は水色少女と向かい合った。

向こうは私を睨んでいるような顔だから、私も睨み返した。どちらも何も言わない。

不意に風が吹いた。立ちこめる霧がゆらゆらと揺らぎ、その間を縫う月の光が奇妙に曲がったような気がした。

「お嬢さん」
「あたい？」
「貴君以外に誰が居る」
「誰も居ないよ」
「名前は何と言う」
「あたいはチルノ。さいきょーの妖精よ」

「そうか」

話が通じない相手では無さそうだから、安心した。

どうやら妖精らしい。そうなると、先程の悪戯少女たちも妖精と言うことになるだろう。なんとなく自分の中の妖精のイメージと合致したから、一人で納得した。

しかし、先程の連中といい、このチルノといい、頭の方はあまりよろしくないような気配がする。もしかしたら他の妖怪同様、私より長く生きているのかもしれないが、やはり見た目相応の中身であるような気がした。

「あんたは何なの」

「僕は人間だ」

「こんな夜中に出歩くなんて、まともな人間じゃなさそうねっ」

「人聞きの悪いことを言うね。僕は至極真っ当な人間だよ」

「そうなの？」

「そうだ」

「ふーん、名前は？」

「何樫という」

「変な名前」

「チルノよりはまともだ」

「何だと、馬鹿にしやがってー、英吉利牛と一緒に冷凍保存してやろうか！」

チルノはそう言いながら、両手の指をわきわきさせながらこちらにやってきた。

チルノが近づくにつれ、なんだか寒くなって来るような気がする。チルノの周囲で霧がパリパリと音を立てて結晶になり、地面に落ちた。よもや、この妖精は氷の力を持つのだろうか。

嫌な感じがしたから、咄嗟に立ち上がり、雲を踏んで空へと飛び

上がった。

「あっ、飛んだ！　待てーっ」

「待たぬ」

チルノが追いかけて来た。

声色が楽しそうである。

確実に楽しんでいる。

こちらは楽しくも何ともないから、癪に障るけれども、捕まると凍るらしいから捕まるわけにはいかぬ。

子供と鬼ごっこをする親ではないけれど、心持はそれに似ているかもしれない。命にかかわる辺りは殺伐としているが。

霧が立ち込める一帯を通り抜けると、あっという間に月明かりに包まれた。

上空何メートルかは分からないけれど、地上が随分下に見えるから、かなり高いことは確かである。より冷たい風が頬を撫で、思わず身震いした。

「あはははは、待て待てーっ」

身震いしていたら、後ろからチルノが来た。

咄嗟に身を翻したら、さっきまで居た所をチルノが弾丸の如き勢いで通り抜けて行った。

「あな、恐ろしや」

思わずひとりごちた。

通り抜けて行ったチルノは、向こうで方向転換して、またこちらに向かって来た。これは怖い。問答無用に怖い。

ともかく、捕まっては堪らないから、こちらも逃げる。逃げると追いかけてくる。ならば逃げなければ追いかけられないのでは、と思ったが、逃げなければ捕まる。捕まれば英吉利牛と一緒に冷凍庫で保存されるらしいから、それは困る。寒そうである。

二つの影が月夜を飛び回る。

一つはそれなりに大きく、もう一つは小さい。

しかし大きい方が追いかけられ、その動きは必死さを増す。言うまでも無く私である。

どれくらい逃げたのか見当がつかぬ。チルノは大はしゃぎしている。

撒こうと思って霧の中に再び飛び込んだけれど、それも大して意味は無い。妖精の目には、霧など目隠しにもならないのかもしれない。

必死に逃げていると、突然目の前に壁が現れた。

咄嗟に前に出した足で壁を蹴って回避したから、激突は免れたけれど、私の直ぐ後ろまで迫っていたチルノは、頭から壁に突っ込んで、「きゅう」と言って伸びてしまった。

助かったらしい。まったく酷い目にあったものだと思う。

足元で目を回すチルノを見降ろしてから、壁の方を見てみる。なにゆえこんな所に壁があるのだろうか、と首を傾げた。

向こう側に何かあるのやも知れぬと思い、壁の上まで飛び上がってみると、真っ赤なお屋敷が建っていた。家主の趣味をとやかく言うのはよろしく無いが、少々悪趣味な気がした。

何ともなしに屋敷を眺めていると、誰かがやって来る気配がした。

「こらっ、そんな所で何をしているんですか！」

振り返ると、赤い長髪をなびかせ、チャイナ服、のような服を来た女性がふわふわ浮かんでいた。

また妖怪か、と私は嘆息した。

五.

何をしているのかと尋ねられた所で、特に何もしていないからどう答えていいものか迷った。

迷ったけれども、ひとまず、お屋敷を眺めていたと答えておいた。他に言いようが無かったからである。

チャイナ服は訝しげな表情で私の方を見ていた。もしかしたら、このお屋敷の人――正確には妖怪だろうけれども、「お屋敷の妖怪」というのは語呂的に釈然としないので、人と形容する――かもしれないと思った。

もしそうだとすれば、夜の夜中に自分の屋敷を眺めている輩が居れば、不審に思うのも仕方が無い。相手がそう思っているならば、その責は相手ではなく、私にあることになる。それは止むを得ない。

チャイナ服は警戒を緩めないようだから、私は怪しい者ではでありません、と一応弁解した。

もちろん、信じてもらえるなどとは思っていなかったけれど、案の定信じてもらえなかったらしい。しかし、最初から信じてもらえると思っていなかったから、特別何も思わない。矢張りそうだったか、というだけである。

あまり相手を刺激するのも怖い。相手はおそらく妖怪である。私はともかく、まともな人間は空中に浮かない。

私は、先程チルノとやりたくもない鬼ごっこをしてしまったから、疲れている。だから逃げるのも面倒臭い。それに逃げられるかも分からない。

無言で見つめ合っていたけれども、痺れを切らしたのかチャイナ

服が口を開いた。曰く、人間がこんな夜更けに紅魔館に何の用事であるか、とのことである。
紅魔館とは何のことか知れないが、用事は何も無い、と言うと、用事も無い人間が、夜の吸血鬼の館を尋ねる筈は無い、さてはお嬢さまを狙う退治師か何かだろう、と詰め寄られた。何の話かさっぱり分からないから、困った。このお屋敷は吸血鬼が住んでいるのだろうか。

「答えに詰るということは、やっぱりそうなんだな！」
「いや、違う」
「嘘をつきなさい」
「嘘などついてない」
「じゃあ、お前は何なんです」
「最近、ここにやってきた何樫という人間です」

私がそう言うと、チャイナ服はポカンと口を開けた。

「じゃあ外来人？」
「そういうものらしいけれど、貴君は何者だ」
「あ、わたしは紅魔館の門番の紅美鈴（ほんめいりん）といいます」
「何の妖怪なのだ。吸血鬼か」
「いえ、普通ですけど」
「そうか」
「と、いうことは、外来人の何樫さんは、お嬢さまに生血を提供しに来たのですね」
「生血とは、どういうことだ」
「あれっ、違うの？」

どうにも話が噛み合わないから、困った。向こうも要領を得ていない顔をしている。

ともかく、少しばかりは警戒を解いてもらえたようだから、もう少し弁明を試みた後、そそくさと退散しようと思った。それで口を開きかけた所で、「うおーっ」という声が聞こえた。チルノが飛び上がって来て、壁の上に仁王立ちした。

「さいきょーのあたいを一撃でのすなんて、何樫、あんた中々やるねっ！　けどさいきょーのあたいは勝ち逃げなんて許さないかんね！　勝負しなさい！」

「嫌だ、お前の相手などしたくない」

「何樫さん、チルノをのしたんですか？　他の妖精なら露知らず、チルノを？」

美鈴が驚いたような声を出した。チルノはそんなに大した妖精なのだろうか。それに別に私がチルノをのしたわけではない。勝手に壁にぶつかって目を回しただけである。

ともかく、話がややこしくなりそうだから、美鈴の問いには答えなかった。どうしようもなく逃げ出したくなった。

嫌だとは言っても、チルノが聞き入れる筈も無い。「勝負だーっ」等とのたまって、氷の塊やら、結晶やら、光の球やらをばしばしこちらに放り始めた。真夜中過ぎにこんな所で大騒ぎをしては、館の人に怒られるような気がしたが、住んでいるのは吸血鬼らしいから、夜中ならば昼間のようなものだろうと思った。その後、昼間でも大騒ぎをしたら怒られるものだと思い直した。

美鈴が怒った声を出した。ここで弾幕を撃つんじゃないとか何とか言って、自分も光弾をばしばし放り始めた。まるで人のことを言えない。すると、チルノの興味は美鈴に移ったらしかった。

「こらーっ、めーりん邪魔するなーっ！」

「うるさいっ、いつもいつも迷惑なのよ、あんたはっ！」
「邪魔するなら、あんたから先に氷漬けにしてやる！」
「やれるもんなら、やってみろっ！」

二人は上空に飛び上がると、花火のように色とりどりの光弾を撃ち合い始めた。
蚊帳の外に這い出すことになった私は、他にすることも無かったから、壁の上に腰かけてその様子を眺めた。花火のようでとても綺麗だった。
そのうち、チルノがアイスクリームフォークみたいなことを叫んで、まるで模様のように氷の結晶を放ちだした。月の光が氷に反射してきらきら光り、思わずため息が出るような美しさである。

昔、北の方に旅に出かけた時、粉のような雪が降る中、太陽がその向こうに輝いている風景を見たことがある。
雪の結晶に日の光が反射して、辺り一面がきらきらと輝いて、自分がここにいるのに、まるきり別の所に来たような錯覚を覚えた。それだけ綺麗だった。今の光景も、それに負けず劣らずである。

美鈴の方も負けじと、色とりどりの宝石の如き結晶を、六月の雨のように降らせた。七色の虹が丸ごと宝石になったかのような具合であった。
宮沢賢治の小説で十力の金剛石というのがあって、その中で宝石の雨が降る一幕がある。
もしそれが実際のものだとすれば、今眼前で繰り広げられる風景に似たものかもしれない。
もちろん、戦ったりはしないけれども、きらきらと宝石が降り注ぐという点では似ている。
予想外に良い光景を見ることが出来たから、何となく得をした気分になった。

そのうち、チルノに美鈴の光弾が直撃した。チルノは「ぎゃふん」と言ってくるくる回り、私の丁度真上に落ちて来た。私は呆けていたから、避けられず、チルノの頭突き――正確には頭落としとでも言うだろうか――をもろに食らった。目から火が出た。

私が目から火を噴いている間に、美鈴も壁の上に降り立ったらしかった。

「はっはっは、まだまだチルノ風情には負けませんよっ」

美鈴の高笑いが響いた。頭が痛いから、うんざりする。

なんとなく、目を回しているチルノを拾い上げてみたが、ひんやりと冷たかったから、やっぱり元に戻した。先程の弾幕合戦で、お屋敷の周囲の霧が飛ばされたらしく、月の光がより強くなったように感じた。

月が地面にあるから、はてと思ったけれど、それは鏡のように磨かれた湖に映ったものであった。どうやら、このお屋敷は湖に浮かぶ小島に建っているらしい。

チルノが目を回しているうちに退散しようと思ったけれど、頭が痛いから、動くのが面倒な気がする。結構な勢いで激突したから、チルノのダメージも相当だろうけれど、私も大層辛い。頭痛は嫌いである。

美鈴は勝利の余韻にしたっているらしく、こちらにまるきり頓着していないから、あれは無視していて構わないけれど、さっきから妖精がちらちらと視界の隅に入るのが気になる。それも、湖で私をくすぐった連中とは少し雰囲気が違うようにも感ぜられるから、嫌な感じであった。

不意に、まるきり違う人物の気配がしたから、振り返った。

月明かりの中、また別の少女が居るらしい。
目を凝らすと、所謂メイド服を着ているらしかった。切れ味の良いナイフのような雰囲気を漂わせているから、どうやら警戒されているらしいと思った。彼女もこのお屋敷の人なのだろう。もしかしたら妖怪かもしれないが。
美鈴、とメイド服が凛とした声で言った。勝利の余韻に浸っていたらしい美鈴は、まるで氷を背中に放り込まれたように、飛び上がった。何故だか冷や汗をかいている。

「さ、咲夜(さくや)さん、あのですね、これは」
「まだ仕事は終わっていないでしょう。早く持ち場に戻りなさい」
「ふえ？　え、あの、怒ったりしないんですか」
「怒る？　何故？」
「あ、いや、それならそれで、あはは、しっ、失礼しまーす」

美鈴は恐々としながら、正門と思しき方へ飛んで行った。私は茫然とそれを見送っていたが、ふと咲夜と呼ばれていたメイド服と目が合った。
彼女の方がぺこりとお辞儀をしたので、こちらも分けの分からぬまま会釈した。彼女より発されるナイフのような気配は静まっていた。
メイド少女曰く、お嬢さまがお呼びだそうである。
行きたくなかったけれども、そういうわけにもいかないから、大人しく着いて行くことにした。外で大騒ぎをしたお叱りでも受けるのだろうか、と内心恐々としていた。チルノは放っておいた。

お屋敷の中は外観と同じく無暗に紅く、薄暗い。家主の趣味が疑われる。
メイド少女について歩いて行くのだが、嫌に廊下が長く、薄暗い。そしてその廊下やら壁やらが無暗矢鱈と紅いから、目が疲れる。吸

血鬼だか何だか知らないけれど、こんなに紅い中で生活していては気が狂うのではないかと思った。
吸血鬼は怖い。血を吸われるのは嫌である。蚊に刺されるのも嫌いな私にとっては、首筋からちゅうちゅう血を吸われて干物になる等、想像するだけで身震いがする。

外界でも吸血鬼には会ったことがある。昼間は出歩けないから、コンビニの夜勤をしていた。吸血鬼の癖をして気が弱く、血を見ると卒倒するのだそうで、何を食べていると尋ねると「専ら野菜です」と言っていた。幻想郷と外界とでは、妖怪の質は随分違うように思われる。

外の吸血鬼は情けないけれど、こういう真っ赤なお屋敷に住む吸血鬼は、きっと血も好きだろう。
ものを食べない私の血はおそらく不味いに違いないから、吸われることは無いとは思う。吸われることは無いけれど、吸血鬼は得体が知れないから、怖い。そのせいか知れないが、紅く長い廊下を進むたびに、自分を少しずつ後ろに置き去りにしているような気がして、心細くなった。

いくら歩いたかは知れないが、お嬢さまの待つ部屋へと着いたらしかった。もちろんドアも紅く、そこまで赤にこだわる理由は何だろう、と首を傾げた。
メイド少女が先に立ってドアを開けると、部屋の窓が開いているらしい、ひやりとした空気が頬を撫ぜて、身震いした。
恐々としながら部屋に入ると、部屋の中はそれほど紅くなかった。成る程、大きなお屋敷のお嬢さまの部屋にふさわしく、金縁のカーテンや、高価そうな調度品等が品よく整えられて、あちこちを控えめに彩っているのが荘厳な感じがした。

件のお嬢さまは、ソファに座っていた。十六、七程のお方を想像していたけれど、どうやら十を超えたくらいのように見える。稗田の阿求嬢と同じくらいであろうか。しかし、妖怪人外の類は、外見と年齢が一致しないので、このお嬢さまも私より遥かに長く生きているのだろうと邪推した。

「紅魔館の主、レミリア・スカーレット様です」

メイド少女が言った。レミリア嬢はちらりとこちらを一瞥した。妙に愉快そうな笑みを浮かべている。

向かいに座らされた。ひとまず、何樫といいますと自己紹介したけれど、どうにも所在が無い気分である。

レミリア嬢は私を値踏みするようにまじまじと見つめている。瞳が紅く、背に蝙蝠のような羽根があるから、やはり人間では無いのだろうと思う。

あまり見られると落ち着かない。メイド少女が淹れてくれた紅茶を口に運んでも、緊張と言うか、怖さのせいでいまいち味がしない。きっと美味しい紅茶なのだろうけれど、味も香りも分からないのではどうしようもない。勿体ないと思いつつも、どうすることもできなかった。

しばらく私を見ていたレミリア嬢だったが、やがて「ふ」と笑って紅茶をすすった。

「氷精とドンパチやるからどんな人間かと思ったら、見た感じは何の変哲も無い人間ね」カップをテーブルに置いたレミリア嬢は言った。「何でか運命はぼやけて見えないけど」

運命とは何のことか良く分からなかったが、長い話になりそうな

予感がしたので、無視することにした。

「別に、やり合ってはいません。追いかけられていただけです」
「ああ、そう。まあ別にいいけど。お前、外来人なんだってね」
「そうらしいです」
「らしい？」
「ここでそう呼ぶらしいということです」
「お前、面倒臭い物言いをするね」
「そうでもないです」
「まあ、いいわ」

レミリア嬢はテーブルに置かれたクッキーを一つ手に取った。

「遠慮しないで食べていいんだよ」
「はあ」
「私は退屈しているの」
「そうですか」
「そこにお前みたいな妙なのが来たから、丁度いい暇つぶしになりそうだわ」
「暇つぶしとは、何です」
「話を聞かせなさい」
「何の話」
「お前、要領が悪いね。外の世界の話に決まってるでしょう」
「それはそうですが、何の話がいいのです」
「何でもいいわ。さっさとしなさい」
「はあ」

私もクッキーを手に取った。レミリア嬢は二枚目のクッキーをさくさく食べている。口の周りに粉がついていて、少しお行儀が悪いな、と思った。

「ああ、そうそう」レミリア嬢は指に付いたクッキーの粉を舐め取りながら言った。「もし詰らなかったら、どうなるか分かってるね」
「分かりません」
「……分かるわね」

レミリア嬢は何だかピリピリした空気を発してもう一度言った。
しかし分からないものは分からない。分からないものを分かると言うのは、よくない。だからやりたくない。レミリア嬢の雰囲気は怖いけれど、やっぱり分からないから「分かりません」と言った。
レミリア嬢はぷうと頬を膨らました。

「何樫お前、わたしを馬鹿にしてないか」
「いや、滅相も」
「もういいわ、分からなくていいから、話をなさい。詰らなかったら、お前をこのクッキーみたいにさくさく食べちゃうよ」
「成る程」

合点がいった。しかし、食べるというのは比喩だろう、と思う。本当に食べるのかもしれないけれど、どの道嫌な目に会うことは確かそうである。
それにしても、最初は怖かったレミリア嬢が、何だか年相応の子供に見えてくるのは何故であろう。威厳を持った様相を呈してはいるが、所々でそれがはがれかけているような気がする。クッキーを頬張る様は人間の十歳児とまるきり大差無い。

それはともかくとして、話をしなければ目の前のクッキーと同じ運命を辿ることになる。さくさく食べられるのは御免である。別に弁士でもなんでもないから、面白可笑しく話が出来る自身は無いけれど、話してみなければそもそも始まらない。

「僕は旅をするのが趣味なのです」
「へえ」
「ここに来るまでも色んな所を旅して回っていたのですが、ある時北の方に行くことになりまして」
「北の方に何しに行ったのさ」
「それはですね、北の方に行こうと思ったのです」
「用事でもあったの」
「用事は何も無いのです」
「……ふうん」
「いつもは一人旅なのですが、火曜日で、その時は道連れが一人いまして」
「火曜日だから道連れが居るの？」
「いや、それは関係無いです」
「火曜日は関係無いのね？」
「無いです。しかし道連れは居ますから、二人で北の方に行ったのです」
「ふむふむ」
「しかし途中で寒くなり出しまして、道連れは寒いのが苦手だというものですから」
「じゃあそこで分かれたのね？」
「いえ、そこではなくて、少しばかり先で分かれました」
「少しばかり先？」
「寒いと言い出してから、半刻歩いたあたりです」
「殆ど言い出してからからじゃない」
「半刻の違いがありますから、その時ではありません」
「まあ、いいわ。それでどうしたの」
「丁度冬の真中あたりでしたから、北に行けば行くほど寒くなります」
「だろうね」

「それで寒くて堪らなくなったものですから、がたがた震えて歩いたのです」
「寒いのが嫌なら、暖かい時に行けばよかったんじゃないの」
「北は寒いものですから、寒ければ寒いほど良いでしょう。暖かい北国になど行きたくないですから」
「そういうものかしら」
「それで震えながら歩き続けて、ある日の夜に北国に到着しました。しかし、見渡す限りの雪原で、町の姿が影も形も無いのです」
「おかしいわね」
「しかし確かにそこに町がある筈ですから、その晩はその雪原で雪に埋もれて寝たのです」
「よく死ななかったわね」
「人間は意外に丈夫です。それに、雪の中は意外に暖かい。埋もれたと言っても、穴を掘って入ったわけでは無く、かまくらのようなものを作ったのです」
「ああ、成る程」
「それで、しばらく寝ていたと思うのですが、ふと目が覚めまして、かまくらの外に出てみたのです」
「何で出たの」
「まあ、お聞きなさい。それで外に出て見ると、小さなかまくらのようなものがあちこちに立っていて、それが雪原のずっと向こうまで続いています。かまくらの中では、小さな灯火がちらちらと揺れている。寝る前までは降り続いていた雪は止んでいて、頭上は一面の星空、さらに大きなお月さまが輝いていました」
「へえ」
「この世のものとは思えぬ風景でしたから、自分が死んだと思ったのですが、そうではなかったのです。だからふらふらと歩いてみました」
「どうだった」
「あちこちにですね、人の形をした影法師が歩いているんです。そ

れらがかまくらの中で灯火を囲んだりして、妙に楽しそうなのです」
「……その影法師って何なの」
「正確には分かりませんが、人間とも妖怪とも違うようでした。ここ幻想郷も現世からずれた所にあるかもしれませんが、そこもそうだったのでしょう。見たことも無い星座ばかりが空に輝いていました」
「……うん」
「しばらく呆けて空を見ていたのですが、ふと自分の裾を引っ張る者がいまして、自分を何処かに連れて行こうとしているらしいのです」
「えっ」
「僕は行きたくありませんから、嫌だと言って振り払いますが、向こうも頑張ります。次から次へと影法師に囲まれて、次第に連れて行かれそうになります。影法師はのっぺらぼうですから、表情が分からない筈なのに、白痴めいた笑いを浮かべているのが分かります。しかも、何故だか分かりませんが、連れて行かれる先がこの世界から余程遠い所にあると分かるので、怖いのです」
「っ……」
「影法師の様子ですが、蝋燭の明かりで揺らめくような具合なのです。丁度今、ほら、レミリアさんの後ろの辺りの影にそっくりで」
「わ、分かった、ストップ！　それで、結局大丈夫だったんだろう？」
「ですから、ここにこうして居るのです。怖かったのですか」
「こっ、怖いわけ無いでしょ！　咲夜！　紅茶が入ってなくてよ！」

レミリア嬢が呼ぶと、メイド少女がさっと現れて、彼女のカップに紅茶を注いだ。レミリア嬢はカップを口に運ぶけれども、手が小刻みに震えているらしい、上手く飲めなかったと見えて、直ぐに止めてしまった。妖怪でもこういう話を怖がるものらしい。

ともかく、食べられることはなさそうである。なさそうだけれど、こんなお屋敷にずっと居るのは怖い。とっととおさらばしようと思い、席を立ったけれどもレミリア嬢に裾を掴まれて引きとめられた。もっと楽しい話をしろということである。余程怖かったのか知れないが、裾をつかむ手がぷるぷる震えている。

断りたかったけれど、断ると食べられそうだから断れない。観念して元の通りに席に座った。

「全く、なんであんな話をするのよ」
「面白くありませんでしたか」
「む……、面白かった、けど」
「どうしたのです」
「お嬢さまは少し怖がりですから、お手柔らかにお願いします」

唐突に現れたメイド少女が言った。レミリア嬢は顔を真っ赤にして憤慨したが、メイド少女は何処吹く風である。どちらが上司なのかまるで分からないけれど、私の頓着する所ではないから放っておいた。

すっかり威厳が吹き飛んでしまったレミリア嬢であったが、私は緊張がほぐれたから落ち着いた心持である。ひとまず、食べたり、血を吸ったりするのは勘弁して下さい、とお願いしたら、お前は不味そうだから、最初からそんなつもりは無いと言われた。安心した半面、複雑な気持ちである。

結局、図らずともここ、紅魔館にて一夜を過ごす羽目になった。

里を出て、妖精にくすぐられたり、チルノに追いかけられたりした頃にはもう良い時間になっていたし、それから大分経っていたから、レミリア嬢にもう二つ三つ話をしているうちに、空が白み始めているらしかった。

吸血鬼は太陽の光に弱い。
外界の吸血鬼もそうであったから、レミリア嬢もそうであろう。昼間はどうしているのです、と尋ねると、別に、とのことであった。何が別になのか分からなかったけれど、特別興味も無かったから、それでおしまいにした。
レミリア嬢は眠くなったらしいから、漸くお暇することになった。結局一晩眠らずにいたから、眠い。外に出たら太陽の下で日向ぼっこをしながら眠ろうと思う。ぽかぽかする陽気の日は、外で寝るのはすこぶる気持ちが良い。

メイド少女――十六夜咲夜(いざよいさくや)だと聞いた――に案内されて、出口まですたすた歩いて行く。相変わらず廊下が長い気がする。しかし、来た時と違って誰も居ないわけでは無く、メイド服を着た妖精たちが行ったり来たりして騒がしかった。

ふと、後ろから何か近づいて来るような気がした。
振り返ろうかと思ったけれども、振り返ると怖いから、振り返らないでいる。

五．（後書き）

小説ってムツカシイですね。

六

咲夜に玄関先まで送ってもらって、それから門の所まで行くと、美鈴が居た。

仁王立ちしているから、何をしているかと思うと、鼻ちょうちんを膨らましていた。立ったまま眠れるとは中々の特技であると感心した。

ぐっすり眠っているようだから、起こすのも悪いと思い、そのまま行くことにしようと思う。

しかし、紅魔館は湖の小島に立っていて、橋も何もあったものではない。館の住人たちがどうやって出入りしているのか気になった。もしかしたら出入りすらしていないのかもしれない。そう邪推した。

相変わらず霧が立ち込めている。

周囲はぼやけているけれど、太陽が霧の向こうで光っていて、薄ぼんやりと七色の輪っかが見えるらしい。

ともかく、春先の水にまた突っ込むのは嫌だったから、また雲を踏んだ。なるべく飛ぶのは控えたいと思っても、昨晩から何度飛んだか知れない。

止むを得ぬ状況ばかりだったとはいえ、自分で思ったことを自分できちんと実行できないのは癪だったから、次着地してからは飛ぶものか、と決意した。

湖を渡り終え、霧の薄くなる辺りまで歩いて出た。

歩きながら、どうしようかと考えた。

何処に用事があるわけではないけれど、旅はしたい。幻想郷の地理には明るくないから、何処に何があるのか皆目見当がつかぬ。

外界を旅していた頃は、目的や用事が無くても、場所は知っているからそこを目指そうと思って歩いたものだが、ここではそれが出来ない。

しばらく考えてから、ふと紫さんに紹介状をもらっていたことを思い出した。

湖に落ち込んだから、濡れて破れただろうかと思ったら、貰った時とまるきり変わらぬ様子で懐に納まっているらしかった。

東には神社があって、お目出度い巫女が居るという。

別にお目出度い巫女になど会いたくも無いし、神社に用事も無いけれど、東を目指すというのは方向性としては素敵である。丁度日が昇って来るから、方角も分かる。

では、太陽を目指して。

私は歩きだした。

良いお天気であった。

霧むせぶあたりを抜けると、上ったばかりの太陽があたりに柔らかい光を落としている。春先の陽光は落ち着きがあるから良い。夏は些か暑すぎるし、冬は冬で弱くて頼りない。春と秋の太陽は素敵である。

けもの道のような、道とも言えぬ所を突き進んで行ったら、里道と思しき所へ出た。

人が通るらしく、地面がむき出しになっていて、車輪の跡などもある。

東の方角ではないが、少し気になったから道に沿って歩くことにした。急ぐ旅では無い。

しばらく行くと、左手の方が少し低くなっているらしい。道は少し高台にあって、左手の盆地の辺りには畑があった。そのさらに向

こうには、若芽が萌えだしたであろう山々が青く光っている。

畑ではお百姓たちが仕事をしていた。

馬も牛も居て、それらに鋤を引かせているらしい。機械の音のしない畑仕事は新鮮である。

ぼんやり眺めながら歩いていると、むこうもこちらに気づいたらしく手を振ったので、会釈して通り過ぎた。

少しずつ高くなる太陽の光があまりにも心地が良い。しかし、腹が減った。一昨日の夕飯が完全腹の中から消え失せたらしいけれど、それゆえに空虚な心持である。あったものが無くなるのは、さびしい。

空腹を抱えたまま歩きまわるのは面倒だから、腹が落ち着くまで寝てしまおうと思う。寝るのに丁度よさそうな所を求めて、道に沿ってずっと歩いていたのだが、しばらく行くと紅魔館がある湖に出た。

何のことは無い、道の先が湖に通じていたのである。元居た所に戻ってしまった。

阿呆なことをしたと眉を潜めたけれど、仕方が無い。ここで寝ることにしようと思う。

出発してから少しばかり時間が経った。それゆえかは知れないが、幸いにして霧が大分薄くなっているから、太陽の光はさんさんと暖かい。

ごろりと草の上に横になると、全身に日の光がしみ込んで行くような気がした。吸血鬼はこういうことが出来ないらしいから、気の毒だと思った。

夏の太陽と違って、何処までも優しげな光だから、浴び続けているうちにうとうとしてきた。昨晩眠っていないことも相まって、睡魔が忍び寄るスピードは速い。あっという間にうとうとして、すっかり眠ったらしかった。

どれくらい寝たかは知れないけれど、胸の上に妙な圧迫感を感じたので、目が覚めた。何かが私の上に乗っているらしい。
ルーミアと同じくらいの重さのように感じるが、まさかルーミアではあるまいと目を開けると、チルノが私の胸の上に乗っかって、顔を覗き込んでいた。
湖にはこいつが居たことを失念していた。チルノと目が合い、ぎょっとした。また鬼ごっこをするのは御免である。
口を利くのが面倒だから黙っていると、チルノが「あんた何やってんの」と言った。「寝ていた」と言うと、さして興味も無さげに「ふーん」と左右に揺れた。

「今は何時だね」
「そんなのあたいが知るわけない」
「そうか」
「何樫、今度は逃がさないよ。あたいと勝負しろ」
「嫌だね。大体、僕は貴君のように弾幕をばしばし放ることは出来ない」
「嘘つけ。あたいをのしたくせに。この嘘つき」
「嘘などつくものかい、大体、のした等と言って、貴君が勝手に壁にぶつかって目を回したのを勘違いしただけじゃないか」
「違うもん」
「違うものか」
「うるさいうるさい、今度こそ冷凍保存してやるんだから！」

チルノが乗っている辺りがひんやりと冷たくなってきた。このままでは英吉利牛と一緒に冷凍保存されてしまうと思ったので、ひょいと起き上がった。起き上がると、チルノはころりと地面に転がった。
また逃げようかと思ったけれど、先程雲は踏まぬと決意したから、

飛べない。それに、逃げるのが面倒である。おぶおぶと両手をばたつかせて起き上がるチルノをぼんやりと眺めた。
起き上がったチルノは、少しばかり腹を立てたような様子だったが、逃げていない私を見て面食らったようだった。逃げるものとばかり思っていたらしい。それとも鬼ごっこを期待していたのか、それは定かではない。

「逃げないとはいい度胸ねっ」
「そうか」
「氷漬けにされる覚悟はできた？」
「待ち給え、僕は降参する。氷漬けは勘弁してくれ」
「いやよ。負けっぱなしじゃさいきょーのめんつが立たないもん」
「丸腰の相手を攻撃するなど最強の者のすることではない」
「そうなの？」
「能ある鷹は爪を隠す。力あるものほど、無暗にその力を振るったりしないものだ。貴君が最強であることは良く分かった。僕では到底勝てない。見逃してくれ」

私がそう言って両手を上げると、チルノはうろたえたようだったが、突如として胸を張り、「そういうことなら、許してあげる」と言った。助かったらしいので、ホッとした。

チルノは、私を子分にしてやると言った。
別にチルノの子分になどなりたくは無いが、断れないから子分になった。
子分とは何をするのか尋ねてみると、一緒に遊ぶのだそうだ。それは子分ではないきがするけれど、変に理屈をこねてチルノに要らない知恵を付けるのも嫌な気がしたから、黙って従うことにした。頭は良くないらしいから、まだ扱いやすい。

では何をして遊ぶのか、と言うと蛙を捕まえて来いとのお達しである。
眠たいから眠りたいけれど、今の私は子分だから逆らえない。蛙を求めてひょこひょこ歩き回るが、見つからない。
蛙は居ないよ、とチルノ親分に報告すると、今は冬眠しているから土の中に居ると言われた。成る程、道理である。
しかし埋まっているものは見つけるのは、至難である。一緒に探そうではないかと言うと、分かったと言って付いてきた。

蛙は可愛い。
よく小さな子供が蛙の尻に爆竹を突っ込んで発破させたりするが、ああいう遊びはいけないと思う。私が幼少の自分も、周囲の子たちはそういう遊びを好んでいたが、私は好まなかった。
ではどうやって遊ぶのかといえば、蛙と差向いになって、延々と見つめ合うのである。それで一日潰したことがある。
それを見た私の母親が、「この子はきっと碌でもない人間になるね」と悲しそうに呟いた。それで今は浮浪者になっている。母は預言者であった。

蛙と向き合うのがどう楽しいかと言われると、別に楽しくも何ともない。
ただ、きょろきょろと目を動かす蛙を意味も無く見つめているのが堪らなく良かったのである。
私は時間を潰すことにかけては、一角の才能を持っているものと自負している。それが世に誇れるものかは別の話だが、そんなことは知ったことではない。

チルノと二人して湖畔の地面を掘ったりしていると、眠っている蛙が出て来た。宝探しをしているようで中々楽しかった。
それで、蛙をどうするのと尋ねると、凍らせると冬眠から覚めな

いのよ、楽しい、と言った。私は眉を潜めた。

「凍らせてしまうのかね」
「うん」
「それは蛙があまりに不憫」
「そんなの、あたいの知ったこっちゃ無いわ」
「僕はそういうのはいけないと思う」
「何で」
「凍らされると寒い」
「寒いのなんかへっちゃら」
「貴君はそうかもしれないが、大方の生物はそうではない。第一、春が来ても起きられないのでは蛙が気の毒ではないか」
「あんた子分の癖に生意気よ」
「親分のことを思えばこそ進言しているのだよ」
「あたいの為？」
「無論だとも」
「ふーん、なら聞いてあげてもいいわ。じゃあ何して遊ぶの」
「あやとりをしよう」

私が言うと、チルノは首を傾げた。あやとりを知らぬらしい。
蛙を元通り土に埋め、霧の薄い辺りまで抜け出した。
太陽は少しずつ西へと傾いているらしい。太陽の具合から見るに、あまり眠れていなかったようである。
さて、あやとりをしようということに相成ったけれども、糸が無い。糸が無ければあやとりは出来ない。それを失念していたから、困った。チルノは何をするのかわくわくした面持ちでこちらを見ている。

しばらく考えて、仕方が無いけれど、天狗の術を使うことにした。
あまり人外の術を使い過ぎると妖怪じみるらしいから、なるたけ

使いたくは無いけれど、仕方が無い。
これは雲踏みとはまた違った術である。雲が踏めたから、こちらの術も使えるであろう。

両手を上げて、空気を掴むように指でつまむ。それをゆっくりと体に引き寄せると、銀色の雲糸のようなものがきらきらと光った。もう片方の手でそれを手繰り、右手左手と糸を紡ぐが如く動かすと、銀の糸はたちまち毛糸ほどの太さになって私の手中に納まった。
銀糸紡ぎという術である。
この糸を使って、古来の天狗は着物を編んだらしい。空気ほど軽いのに丈夫で、飛ぶのにうってつけだそうだ。今はこれをやる天狗は全く居ないらしい。絹や木綿の服の方が着心地が良いのだそうだ。世知辛い気がする。
ちなみに、外界でこれをやると、灰色で、酷く薄汚く、すぐに千切れてしまう糸が出来た。空気の綺麗さが糸の質に関係するのかもしれぬ。
チルノは私が糸を紡ぐのを見て、きゃあきゃあとはしゃいだ。

「それがあやとり？」
「違う、これを使ってやるのがあやとりだ」
「どうやるの」
「見てい給え」

取り出した糸を両手にかけ、右手で左手の糸を手繰り、左手で右手の指の糸を引っ掛け、なんやかんやといじりまわすと、形が出来た。

「これが箒」
「糸だよ？」
「形を見るのだ」

「あ、箒だ。箒だー」

理解できると、チルノは興奮気味に「あたいもやる！」と騒いだ。

糸を渡してやると、両指にかけてめちゃめちゃに絡ませてしまった。

何だかよく分からない形になった糸を、チルノはぽかんと見つめた。

「何これ」

「知らん」

「箒はー？」

「教えてあげよう」

絡まった糸をほどき、最初からチルノに教えてやることにした。

チルノは見た目相応の中身で、随分せっかちなものだから、私が言う前に勝手に糸を手繰ったりして、結局絡ませてしまう。

それで五、六回失敗した後、ようやく箒が完成した。

「出来たね」

「箒だ」チルノは私の方を見て嬉しそうに笑った。「箒だー」

「次は別の形を教えてあげようか」

「箒はどうするの」

「それはほどいてしまわねば」

「えー、やだやだ、勿体ない」

「そうか」

チルノが地団太を踏むから、考えた。

しばらく考えて、では糸をそのまま凍らせてみたらと言うと、糸は箒の形のまま見事に凍り、チルノの指から外しても形は崩れなかった。チルノは無邪気にきゃあきゃあとはしゃいだ。

これで沢山オブジェを作ると楽しい、とチルノが言ったから、じゃあそうしようということになった。
それでしばらくしたら、地面に沢山のきらきら光る氷細工が立ち並んだ。傾いた日の光が反射して、とても綺麗である。

不意に強い風が吹いてきた。すると、氷のオブジェたちはしゃらんしゃらんと音を立てて砕け、空気に溶けてしまった。この糸は元々空気から紡ぎ出したむのであるから、壊れると元に戻るのだろうと思った。

「何樫、大発見！　あやとりしなくても、糸をそのまま凍らせた方が楽しい！」
「そうか」

見ると、私が紡ぎ出して空中に漂う蜘蛛の糸の如き銀糸たちが、チルノの発する冷気を受けて、網のように凍りついていた。そこにチルノが飛び込むと、氷たちは音も無く砕け散り、砂よりも細かい粒子になって一瞬光り、空気に溶けてしまう。成る程、綺麗である。

チルノと夕暮れ近くまで遊んだ。
遊んだと言っても、大抵はチルノが一人ではしゃいで、私がその周りでうろうろしていただけであった。
西の山に暮れかける太陽が空を真っ赤に染めていて、霧が薄くなった湖も、赤く揺らめいていた。夏でもないのに、夕暮れがこれほど赤いのは異様な気がした。

チルノが帰ると言い出した。
異論は無いから、帰ればよろしいと言った。明日も一緒に遊ぶのよ、と釘を刺されたけれど、嫌である。「はあ」と曖昧に言葉を濁し、チルノが居なくなってからさっさと湖を離れた。

見つかったら怒られるかもしれないけれど、チルノは頭の具合はよろしくなさそうだから、しばらく会わなければ忘れてしまうだろうと思う。

暮れかけて、影が長くのびる道を歩いて行った。

山と空の境が夕陽の為に橙色に染まっており、紫色の境目を超えて、藍色の夜空が広がっている。その中に一番星がきらめいているらしい。

人間が居ることは分かるけれど、薄暗いから誰だかは分からない。この時間帯を指す「黄昏」という言葉は、「誰そ彼は」というところから来ているらしい。私の好む時間である。

幼少の頃、友達と夕暮れ近くまで遊んでいると、五人居た友達が六人になっていることがあった。誰だかは分からないけれど、知らない子供が混じっていた。

顔が見えないから、誰だかは分からない。しかし、確かに遊んでいる時は人数が増えていて、帰るときには元通りの人数であった。

夕暮れ時にかくれんぼをしていた時に、いつまで経っても見つけてもらえず、世が更けても帰らなかったから、町内が大騒ぎになったことがある。

友人たち曰く、六人で遊んでいたから、確かに六人見つけ出して、皆で連れだって帰ったとのことであった。

その時は、友達が勘違いしただの、意地悪をしたのだのということになって、皆怒られていたが、よくよく考えてみると、私以外の「誰か」が混ざっていたのだろうと思う。夕暮れ時はそういうことがよくあった。

大人になってからは、そういうことはしばらく無かったけれど、旅を始めてからはまたそういうことに出くわすようになった気がする。要因は定かではない。

ともかく、夕暮れの道を歩いた。

外界と違って街燈の一つも無いから、暗くなると本当の暗闇が辺りを包む。人間と言うのは本質的に暗闇を恐れるものだが、私は暗闇に包まれているとホッとする。

本来、宇宙というものは深淵であって、暗闇である。

今は一時の気まぐれで太陽が照らしているに過ぎず、暗闇が自然であるのだろうと思う。尤も、日がな一日真っ暗では景色を楽しむこともできないから、やはり太陽は必要であろう。

ようやく腹が落ち着いたらしく、空虚な気持は無くなった。だが、チルノと遊んでいて誤魔化されていた眠気がむくむくと押し寄せて来たから、今夜の寝床を決めなくてはならない。道端に寝るのは嫌だから、道を外れて脇の林の中に踏み込んだ。

魔法のコートがあるから、ぬくぬくと暖かいけれど、足の先や顔は夜風に吹かれて冷たい。

枯葉の布団で構わないから、何処か眠れる所はないものかと見回したが、まだ夜目が利かないからあまり周囲が見えない。暗闇に目が慣れるまで、寝床探しは難航しそうである。

当ても無くさまよっていると、妙な音が聞こえてくる気がした。歌の様でもあるが、何かの鳴き声の様でもある。音階がありそうで無さそうな、奇妙な旋律らしい。すわ、妖怪か、と私は目を細めた。

注意深く辺りを見回してみると、木立の間の遥か向こうに、ぼんやりと赤い光が見える。提灯の明かりらしい。

こんな所に誰か住んでいるのか知ら、とそちらに歩を進めてみることにする。

近づくにつれ、どうやら家とは違ったものであるようであることが分かった。

暖簾が掛かっていることから、屋台であるらしい。

こんな人気のない所で屋台を開く輩がいるのであろうか、と訝し

んだが、ふと妖怪の屋台であるかも知れぬと見当を付けた。人の肝を焼いたり煮たりして売っているかもしれないと思うと、怖くなった。

怖いから立ち去ろうと思ったけれど、何となく気になってしまう。先の奇妙な歌声もあちらから聞こえてくるらしい。

歌っているのは屋台の店主か、はたまた客であるか。

それはともかくとして、歌声を聴いていると妙な心持になって来る。

遠目が利かなくなって、見えなくなるような気がする。どうにも落ち着かない気持ちになって来た。

ふと、夜雀という妖怪のことを思い出した。

夜道を歩く者にまとわりつき、その鳴き声を以ってして人を夜盲症、所謂鳥目にするという妖怪である。ただ、地域によって不吉なものであるとされたり、逆に良いものとして扱われていたりと色々である。

もし夜雀だとすれば、ここ幻想郷の夜雀は良いものか悪いものか。しかし、視界が狭まって来るのがこの鳴き声の為だとすれば、あまり良いものではなさそうだと思う。

しかし、怖いもの見たさというものがある。

怖そうなものほど、見たい。お化け屋敷で背後に何かの気配を感じ、怖いものがあると分かっていながらも振り向いてしまう、そういう気持である。

何となく両端が狭まったような視界のまま、屋台の方へ近づいた。

屋台からは煙がもくもく上がっていて、何かを焼いているような音と、タレの焦げる香ばしい香りがしていた。焼き鳥かと思ったが、赤提灯に印されたる文字は「鰻」である。

客の姿はなく、歌声は煙る屋台の向こうの少女が発しているらしかった。
随分機嫌が良さそうである。ただ、背中から鳥の羽根が生えている所を見ると、やはり妖怪なのだろうと思う。
茫然と屋台を見つめていたけれど、やがて少女の方が私に気付いたと見え、目を瞬かせた。

「人間？　こんな時間にこんな所に、珍しい」

妖怪少女は呟いた。私は何と言っていいものか分からないから、黙っていた。
考えて見れば、屋台に来たは良いものの、お金など一銭も持っていない。酒を飲もうにも代金が無い。怖いもの見たさで来たけれど、来た所で何の用事も無いからどうしたものかと思った。
そのまま振り返って何処かへ行ってしまおうかと思い始めた所で、妖怪少女に手招きされたので、仕方なしに屋台の方へ近づいた。
相手は妖怪だから下手に逆らって食べられても嫌である。鰻と一緒にじうじう焼かれるなどまっぴら御免、と思いながら椅子に腰かけた。鰻の焼ける良い匂いがした。
妖怪少女は私の顔を見てにやにやと笑った。

「人間、あんた運が良いね」
「なにゆえ」
「今日のわたしはお仕事モード。普段のわたしは妖怪モード」
「妖怪モードだと、どうなる」
「鳥目になったり、夕飯になったり」
「誰が」
「あんたが」
「そうか」
「でも今日は屋台のおかみだからね。お客を取って食ったりはしな

いよ。公私混同はしない夜雀、それがわたしです」
「貴君は夜雀なのかね」
「そうよ。夜雀のミスティア・ローレライ。あんたは」
「僕は何樫という」
「ふーん、外来人？」
「そうらしいね。しかし夜雀、外界で声は何度か聞いたけれど、直接会ったのは初めて」
「あらそう」
「生まれはどちらかね、四国か、畿内か」
「そんなの忘れたわ」
「チッチッチと鳴く鳥は、シナギの棒が恋しいか、恋しくばパンと一打ち」
「あ、止めて、それ嫌い」
「成る程、四国の生まれかね」
「不躾な確かめ方だわ」
「謝ります」
「まあいいわ。ご注文は」

そう言われて、私は眉を潜めた。なにせお金が無いのである。注文はと尋ねられても注文が出来ない。
黙っている私を見てミスティアはどうしたのと尋ねた。

「生憎とお金を持っていないのです」
「何、冷やかし」
「そういうつもりは無かったけれど」
「ちぇ、詰んないな」

ミスティアは本当に詰まらなそうに口を尖らせた。
こちらの言い分としては、ミスティアの方が手招きしたと言いたいけれど、なんだか無暗に悪いことをした気分になったから、そう

いうことは言わない。
しばらく黙っていたけれど、ミスティアの方が口を開いた。
「じゃあさ、ツケでもいいわ。お客が来てお酒の一杯も出さないのは癪だし」
「はあ、しかし」
ツケは嫌いなのです、と言いかけて黙った。ミスティアの目が不機嫌そうに光ったからである。
ツケともなると、後日お金を払いに来なくてはならない。そうなると、再びミスティアと会わなければならないから、それは面倒である。だが、他に方法は無さそうだから仕方が無い。
ではいただきます、と言うとミスティアは満足そうに頷いて、徳利を取り出した。冷やか、お燗かと尋ねられたから、お燗してくれと頼んだ。この季節、夜の酌は熱いやつに限る。
屋台で飲むのはまったく久しぶりだから、何となく心が躍った。まだ飲んでもいないのに、無暗に楽しい気分になった。
ミスティア曰く、人間のお客は久しいとのことであった。やはり、幻想郷に於いて夜に里の外を出歩く人間はあまり居ないらしい。
あまり、ということは居ないことはないのか、と尋ねてみると、「非常識な連中は夜でも出歩くわ。巫女とか、魔法使いとか、メイドとか」ということであった。
幻想郷の巫女やメイドは、妖怪相手に大立ち回りでもするのだろうか、と腕を組んで考えたが、想像できなかった。
湯気が立ち上る熱燗はやはり旨かった。体の芯が温まるような心持がした。
鰻も勧められたが、食べるのが面倒である。旨そうだけれど、それはまたお金がある時に頂くことにして、今回はお酒だけいただく

と言った。
ミスティアは退屈していたらしく、あれこれと話をしてきた。
どうも幻想郷の妖怪は基本的に暇を持て余している気がする。
話に付き合っているうちに、一杯だけの筈が、沢山の徳利がカウンターに転がった。自分の悪い癖が出たと嫌な気持ちになった。

お酒を飲み過ぎて嫌な気持ちになるのは、こういう風に際限なく飲んでしまって、罪悪感ともなんとも取れぬ思いに駆られて、お酒が美味しく無くなることである。だから、もう結構と飲むのをよした。もっと早くに気が付くべきであった。しかしミスティアは沢山酒が売れたから満足したらしい。

「何樫は酒豪だね。鬼とも飲み比べが出来るんじゃないの」
「飲み比べなぞ碌でも無い、酒はしみじみ旨いから良いのだろう」
「まあいいけどさ。じゃ、御代は後日ね。踏み倒したらただじゃおかないよ」
「踏み倒したら、どうなる」
「頭からばりばり食べちゃうよ」
「そうか」

それは御免被りたい。やはり後々御代を払わなければいけない。
どうやって金策をしようか、そんなことを考えながら、目の前で立ち上る炭の火をぼんやり眺めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1858z/

生活の柄〜幻想郷放浪記〜

2011年12月25日23時53分発行